

幼児の教育

1

お茶の水女子大学
昭和
48.1.26
附 贈 履



お茶の水女子大学図書
和 昭
49 83753

豊かな保育の世界がここから始まる……………



保育カリキュラム資料

〈全6巻〉 (5、6のみ近刊)

- 1…春 2…夏 3…秋
4…冬 5…遊び 6…小事典

B5判 136頁 各巻600円

(送料 110円)

子どもは一時としてじっとしてはおりません。その一瞬一瞬を力いっぱい活動し生活しているのです。せっかく苦心して作り上げたカリキュラム表も、あっというまにくずされることもしばしばです。

そんなとき、いつ、どこでもすぐに役立つのがこの資料集です。あしたのカリキュラムのためのヒントを集めた、あなたのための保育ハンドブックです。

《冬》



幼児教育界をリードする新書判シリーズ

フレーベル新書

7 自然物のおもちゃ

滝田要吉著 定価360円

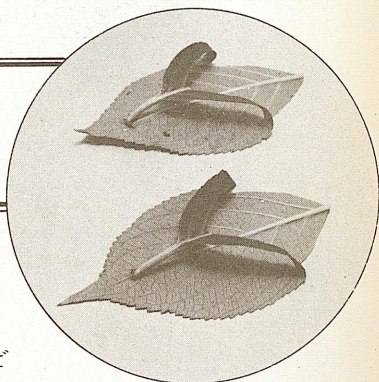
葉っぱや野菜、卵などを使って

子どもたちが作る人形や動物……。

昔から伝わる草花細工に麦わら細工など

おとなには郷愁を、子どもには自然を

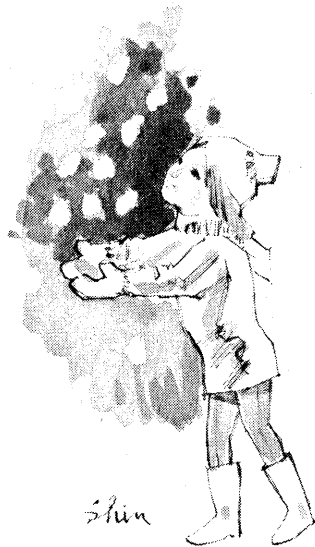
発見させる楽しい工作集。



「自然物のおもちゃ」内容より

幼児の教育

第七十二卷 第一号





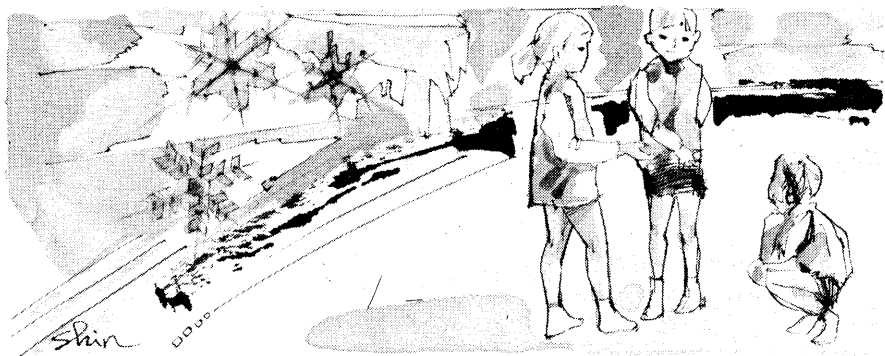
幼 児 の 教 育 目 次

— 第七十二卷 一月号 —

©日本幼稚園協会
1973

表 紙 赤坂三好
カ ッ ト 齋藤信也

| | |
|----------------|---------------|
| 還暦から幼時を憶う…………… | 千谷七郎……………(4) |
| ★対談 新春対談…………… | 串田孫一……………(8) |
| …………… | 周郷博……………(8) |
| 一九七三年を迎えて…………… | 折原祥子……………(24) |
| 一九七三年を迎えて…………… | …………… |
| —保育新論—を思う…………… | 相馬誠子……………(28) |



子どもの生きがい……………松隈玲子…(33)

精神薄弱児の保育……………石割陽子…(40)

子どもと民話……………中村博…(46)

幼児教育の源流(Ⅱ)……………宮本光雄…(50)

ルソーの幼児教育思想(下)……………島田ななみ…(65)

私の保育……………津守真…(70)

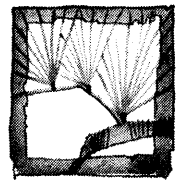
土をこねる……………津守真…(70)

編集委員・周郷博・堀合文子
 本田和子・河井祥子
 編集主任・津守真・赤間峰子

還曆から幼児を憶う

秋の彼岸の中日に還曆を迎えるちょうど一週間前、親しい西独の一哲学者から一通の手紙が届いた。彼との知り合いはもう古いが、この年の初夏再度の渡欧以来彼とある共同の仕事をしてほとんど完成に近づいていたころなので、何かそれに関係した事かと思いつながら封を切つて見たところ、思いがけなく私の還曆に寄せての祝文というよりは、むしろ私への希望をこめた忠言の真情を吐露した一文のように受け取られた。恥ずかしい事に私は彼の生年月日を正確に知らないが、七十歳近いことは確かである。従つて書簡の内容は「幼児の教育」ではなく「老人の教育」と言つて然るべきものであるが、両者は共通して人生の一齣である。幼児の教育に無縁ではないと思うので、この一文を紹介して世の母親さん方の参考の一つの材料にしていただくことができればと思う。

「六十年、それは美しくまとまつた数です。子供たちはもう相当に大きくなっています。そして、私たちには徐々に、全く



千谷七郎

徐々に何か孤独のようなものが強くなり始めています。仕合せな夫婦であれば、この孤独を分かち合います。多分自分だけは例外であつて、永遠に生きるであらうと思つていたような若者の夢はもうめつたに見ることはありません。百年前までは六十歳となれば年寄りだというのが通念でした。今日では老年は七十にならなければ、と考えられています。その事がどうのと言ふことはないので、その背後には老齡をいやがる気持ちといたつたものが潜んでいます。こういう嫌悪は人間だけがいただくものかもしれません。さて、こんな長い前置きをしましたが、やつとこれからが貴方に贈る私の祝辞です。

右のような嫌悪を、できるだけうまい折に忘れ去つていただくことができれば、と願うのです！ もし貴方が満足のうちに従容と年を取り、そしてこの尊ぶべき老年の贈物を享受されることに成功されればと願うものです。落ち着いた心に過ごし、勢力争いの喧騒から離れて、外見的な諸事を望まず、そして太古のものに与ることのできる老年の贈物です。太古のものと言

えば、日光や土の香、鳥の声や蝶の飛びかい、それに雲脚（雲の足）もあれば、また子供たちの微笑、若者の美しきや、若者の馬鹿騒（馬鹿騒ぎ）も昔からのものでしょう！

君、言うなかれ。そんな願いは早過ぎる、七十になつてからに願いたい、と。否、否、そうでない。このような願いはもう六十歳で始めなければならぬ。なぜなら、年を取る練習は早目に始めなければならぬからです。そうでないと、これらの願いはついに達成される時がないからです。また、君、言うなかれ。私が何か大切な事を忘れていたのではないかと。私は決してそれを忘れたことはありません。「抗争者」(註、ルートヴィヒ・クラークスの千数百ページに及ぶ主著)の翻訳という君の大仕事を。どうして私がそれを忘れることがあるのか？ 私はこう思うのです。今述べた願いが達成されれば、君はこの大仕事を完成するだろう、と。

もう一言、附け加えさせていたきたい。幸福についての詩が一句思い出されました。それはゲーテの「イフィゲーニエ」の中で、苦難に耐えた人の口に上つた言葉ですが、貴方もゲーテを愛読されているので、この詩句で私の祝辞を結びたいと思うのです。第一幕第三場で巫女は王に莊重めいた口調で凱旋の祝辞を述べてあいさつする。王は巫女に次のように答える。

王者であろうと、庶民であろうと、最も幸福な者というのは、自分の家が仕合せにいつている者だ。

わがドイツ文学の中でも、人間の幸福をこれほど偉大に、これほど深く、これほど簡明に述べた言葉は他のどこにも見当たらないと思います。ここには陰陽の秘奥がこめられています。

……

ちょうどこの書簡が届いた折、もうかなり柔らかくなった秋の日差しを一杯に受けながら、書斎の縁側に届かんばかりに紫と白の萩の花が咲きこぼれている。その花から花に小蝶が舞っていた。蝶が下りると梢頭が揺れる。それとも、そよ風が揺らしたのか。澄んだ空気が縁側をつたわつて来る。外気に誘われて縁側にたたずんで見れば、遠くの空に夏の名残りの積雲が幾分乱れ勝に静かに動いている。東と西に遠く万里を距ててありながら、どうしてこうも気持ちを通じ合うものか、不思議な感じさえする。彼の言つて来ていることは気がついて見れば、もう自分の日常になつている。彼はそれにあつためて注意を向けてくれた。一日の長のゆえに、これを老年の贈物と言つてくれた彼の友情が心にしみ通る。

文字通りの坪庭で、石などという面倒なものはなく、職人など入れたこともなく、妻がその日その日に面倒を見てくれるだけなので、近ごろは落葉がたまって焼くな、みんな土になつてくれるんだから、などと言つたりする。一枚の落葉の下にも何億という微生物が生きて、そして地殻を支えていてくれ

るなどと思う。くもが巣を張っていても、できるだけくぐって通るような気になってしまふ。ここにも生命が息づいているし、それに害虫をかなり整理してくれるのだからなどと。

それが年というものかもしれないし、またそう言われるだろう。しかしこうしたひと時にこそ私は最高の心の安らぎを感じると同様に、思いは幼年のころに回る。なぜだろうか？ 私共に、それと意識しないのに回想を呼ぶのは、今とかつてとの間に根元的類似があるからに違いない。老が幼を呼ぶ！ くずれかかる積雲の頭や脊、そよぐ萩の梢頭が揺籃の気分を呼びさますのだろうか。間をおいて聞こえて来るこおろぎの聲が庭の砂場に遊んだ幼時の気を呼び返すのか。

しかしあらためて幼時を回想しようとする、はつきり具体的な形をとっているものがなんと少ないことか。それは今では謎のようにしか思われないある微光が漂っていたことである。山陰の城下町に生まれて幼稚園に一年通わせられた。熱心な、佛教信者の家庭に生まれながら、アメリカ人宣教師の幼稚園に通ったのだが、あまり自分の性に合わなかったか三分の一も出席しなかったように思う。当時の建物や先生方の顔は今でもはつきり思い出すことができるほど鮮明だけれど、その他には、お祈りの文句はついに覚えることなく、ただその時間が過ぎ去るのを口をもぐもぐしながら待ちわびたこと、壁に羽のついた

童子の絵がはってあったが、何か奇妙な感じがするだけで何の興もひかなかったこと、運動場の砂場、それに卒業式にはペソをかきながら無理やりに出席させられたことぐらいいし思い出せない。しかし、お寺の方は何か性に合うところがあつたのか、毎年夏の終わるころ盆灯籠を建てに、夕暮れに兄弟子供だけで、歩いて十分とからぬ墓にお参りするのが楽しかったような記憶がある。

はつきりした記憶と言えば奇妙な事に、奇妙な事が一つあるだけである。ある年、いざ出かけるとなつて、市松模様の浴衣でなければ、と駄々をこねて母親を手古ずらせたことである。母は何かの理由で、それはいけないというのをどうしても納得せず、とうとう押し入れから出させて着て行ったことである。どうしてその時私が市松模様の浴衣に愛着したかはわからない。翌年のお盆が来たときはもうねだらなかつたし、前の年の事を不思議な思いで回顧することができたぐらいであつたことを覚えていゝる。私の父は婿養子であつたので初夏の甲の祭りのときはいつも父に連れられて四キロぐらい離れた海辺の村に歩いて行くのがならわしであつた。親戚の人々の顔や祭のご馳走のことなどは、その後たびたび出かけたことであるから覚えていゝのは当然として、まだ物覚えの定かでないころのまた奇妙な記憶が一つある。四歳ぐらいのころかと思うが、日が沈みかか

て来て、父に連れられて川沿いの砂道を歩いて帰途についた。ふと見ると川べりの笹やぶの中に薄暗い影が見えた。私はそこを指さして、狐がいると言って父の手につかまった。父はそんなものは見えないという。いやいるといって、とうとう押し問答の末、父の肩車に乗ってそのところを数メートル通り過ぎてほっとして肩から降りたことがある。

四五歳ころまでの記憶を総ざらいしても、こんな他愛のないことしか、それも前後の脈絡もなく、全く断片的にしか思い出せない。それでも物心のついた時にはもう氷いでいたから、いつ覚えたのかはわからないが、ともかくも物心のつかない間に家の前を流れる川で氷いでいたであろうし、魚も抄い、野原に蝶やバッタを追っかけ、氏神さんの樹間を抜けながら蝶をさがしたことも確かである。捕えて来た蝶や蟬、魚などは、いつも後で放つて、殺さないようにさせられていたから。また、月に向かって走る黒雲と走り比べしようとかけ出したり、恐ろしい雷雨や暗がりで驚愕したり、夏空の壮観な入道雲に見とれたり、春風に袖をふくらませたり、雪解けの濁流に心はずませたり、あるいは子ども心に「良心」の疼きを感じたりしたこともあっただろう。しかし今ではすべて謎のようにしか思えない微光に包まれているだけである。この微光は、私共がそれを生き生きと見ることに夢になつていた幼年時代にはついに正体を見せ

ずじまいに終わつていたので。

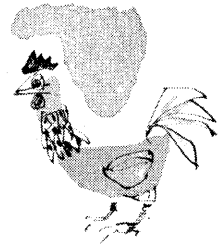
今、老年の贈物に与ろうとするこの時、このような幼年時の微光が蘇生して来る思いがする。そしてこのような微光こそ、その時は夢中のままに過ごされるために気づかれないけれど、人生の地下水を流れる生命の泉であることが知れる。子は父になり、母になる。そしてやがて老年の尊い贈物を知るに至る。こんな長い目で幼児を見てほしい。このごろになつて両親や祖母、それに年寄つた親戚の人々が見せた優しいまなざしの笑顔が時折にまぶたに浮かぶ。それは今にして思えば、世の辛酸を経た、あるいは経ながらも、しっかりと生命の泉に浸ることのできた人々が幼児に寄せた思いやりの、成長の期待のこもつた微笑のまなざしであつたと思う。小利巧に育てないようにと、世の母親にお願ひしたい。

新年を迎える幼童の門出を祝して

日の春をさすがに鶴の歩みかな 其角

(東京女子医大)

新春対談



串田 孫一
周郷 博

★ おまけ

串田 最初からおかしな話ですけど、グリコにおまけがついていますね。おまけの歴史なんていうの、誰か書いている人ないかと思ひましてね……。

周郷 今は違うんですよ、子どもにきいたけど。そんな素朴じゃないんです。

串田 “買わせるようなおまけ”で

すか。

周郷 もとは本当に“おまけ”で愛さようでしたよね、実用ぬきの。

串田 家の近くに小学校がありましてね。ビスケットに券がついているんですね。それを何枚かためて送るともらえるんです。月光仮面か何か……。そのビスケットが往來いっばいに捨ててあるんです。ビスケットは食べたくなかったです。

周郷 そう。そう。

串田 びっくりしちゃったんです。

周郷 つまり、付録文化になっちゃったんですね。お母さんがデパートに行く、それもおまけのために行くようなものです。

串田 お茶を飲む券がついてくるといそいそみんな行く。ご内覧とか何とか、ちょっと特別扱いにするとうれしくなってしまう。

周郷 そういうのがどんどんひどくなっちゃって、そういう中に人間がまきこまれちゃってる。何が人生において大事なのか、何が附属的なのか、わからなくなっちゃってる。

幼稚園というものがおまけ的なものになってる気がするんですけど、どうでしょう。

串田 私のところは、今のところそういう家族がいらないんですけど、どこの教会へ行くとどこの幼稚園へ入れ

る。するとこの小学校、というふう
に順々に行く。前にいた大学の面接の
時「なぜ入るのか」というと「ここへ
くると〇〇商社へ入りやすい」とか、
それだけしか返事が出てこないんです。
最後のところがどうなのか、ここへい
けば安楽死ができるとか……。 (笑い)
周郷 何が本体で、何が真剣にとり
くむべき問題かというところがなくな
りましたね。

串田 なくなりましたですね。

周郷 そこを、いいかげんにしてい
ても生きていられるんでね、付録みた
いに。でもそれだけだと、心で本当に
こう、何かをやったという満足がない
から、それにまた食品が悪いから (笑
い) 顔につやがなくなつてぶつぶつな
んか出てくる。若いくせに。

串田 私は政治家っていうのはおつ
きあいがなければ、政治家っていう
のはたとえば大臣になるためにその道

を探して行く。悪いことをしても……。

そこで大臣になって革のいすか何かに
すわつて一瞬満足を感じるかもしれないな
いけど、いざ自分の家へ帰ると、うち
のおじいさん遊んでくれないなんてお
孫さんたちが逃げてしまふ。政治家の
表情っていうのは、ちよつと今おつし
やつたようなどんな顔もできるように
用意してある顔っていうのでしょうか。
周郷 そこへいくとやっぱり田中さ
んが毛沢東にあつて「少年のような人
だ」なんて感激してびっくりするわけ
だね。

串田 昔は政治家でも個性をはつき
り出した。そのために特徴のある顔を
した政治家がおられたと思います。

★ 幼稚園の思い出

周郷 串田さんが、ここにおられた
そのころのことをおききたいという
のが今日の一つのことなのですが、何

年ごろですか？

串田 十年、十一年、大正の。小学
校二年の時が大地震ですから……。

周郷 すると、あそこのお茶の水。

串田 ええ。家がお茶の水の近くで
はあつたんですが、その前は芝におり
まして、そこから通い始めたんです。
串田へ越すことはきめて入れたらしい
です。くるまへ乗せられましたね。通
いました。

周郷 くるま、人力ね。

串田 これは、私自身は記憶にない
んですが、母がしょっちゅういうもの
ですから。

その試験の時に、芝からおこつて自
動車に乗って来たんです。その試験で
乗物の絵がありまして、この中のどれ
に乗って来たか」と聞かれました。と
ころが自動車がないんです。しかたな
くもじもじしてたんです。それで自動
車で来たっていったら、先生に母親が

呼ばれて、今日は仕方ないですけど、これから先、こういうぜいたくな事はしないように”と叱られたそうです。

大分親がこたえたらしく、小学校のころは麻布におりまして暁星に通いましたが、一時間半ほど歩いて行かされたり、雪の日なんか辛い思いをしました。

周郷 それで、幼稚園はお茶の水で、あと暁星へ行かれたわけですね。

★ れんがの粉作りと茶巾しぼり

串田 ちょうど新庄先生のなくなられる前にここを拝借しまして、三時間ばかり新庄先生もおよびして集まりましたんですけれど、いろいろなことを先生の方がよく覚えていらして、先生が何かおっしゃると、そうだった、そうだったなんていうことがずいぶんございました。

つまらない事は覚えてるんです。れ

んがをすり合わせて赤い粉を作りまして、それが大事なんです。紙に包んで家へ持って帰ったものです。

周郷 いいですねー。

串田 その当時一人いたずらっ子がいましたね。その名前はみんな覚えていました。十人足らず集まった、全部が覚えていました。

それで、女の子と男の子が一緒だったんですけれど、男の子だけ外へ遊びに出されて、その間に茶巾しぼりを女の子が作ったんです。お芋にお砂糖を入れたのをねって、それを布の上ののせてこうひねる。そして”できました”っていわれて男の子がぞろぞろ入るわけです。

周郷 それ、いいねー。女が変になつてきたから、女らしくなっている。

串田 それは子ども心にね、女の子ってというのはこういう事ができるんだなって思いました。

周郷 感心するわけですよ。そして尊敬することになるんです。いま、個性をのばすとか何とか口でいってるけど、ちっとも個性が生かされてないんです。これは個性を生かすのにとってもいい。

串田 簡単ですしね。

その集りをしたのは三年ほど前ですが、いい年をしたじいさんばあさんがすべり台にのったりなんかして遊びました。新庄先生は一人一人の事をよく覚えていらして、ぼくのことを”あなたは集りの時も来なくて、裏の物置きのところを草をむしって、ひねくれた子どもだった”とか。(笑い)

周郷 しかし、そういう小さい時のことをいわれると、いやじゃないね。

串田 ええ、気持ちいいです。何かうれしくなつて……。そういう先生の前で、ぼくはとうとうたばこは吸えませんでした。叱られそうな気がして。

周郷 そうだと思うね。

★ 暗唱する

串田 先生自身は、私あのころどんな事を教えていましたか、なんて聞かれましたが、これらもあまり覚えてないですね。

何か、暗唱させられてね、童話を。

長いんですよ、全部しゃべったら十分ぐらいかかるような。小さな駅に駅長さんと荷物係がいて、一日一回汽車が着く、それをまっつてでどうこうという、途中まではわれわれも覚えているんですけど、終りは忘れちゃいました。

周郷 それもやりたいなあと思つてることなんです。ヨーロッパならやつてると思う。何の事かわからなくても、文章は心にひびく意味深いものです。あとで物を見たりなにかする時にいいことが出てきますよ。

串田 そのあと暁星でもやりました。

できないとなくられるんです、小学校一年で……。

周郷 それは日本語ですか、フランス語ですか。

串田 フランス語です。フランス語はきびしくて、つまりご不浄へ行くにも日本語でいったら行かしてくれないんです。手を上げて「カビネ」、大きい方だったら「グラン カビネ」っていうんです。(笑い) 日本語でいったら先生知らん顔なんです。ですから途中でもらすのもしました。

まる暗記っていうのも案外いいものですね。

周郷 小さいうちに、わからなくても、聖書の文句でも、いい詩でも、レシ、(rosi) 小さい物語ですね、それを暗記しなければいけないんですよ。子どもは、知らないでわかる、という年齢があると思う。それが今の幼児教育には忘れられていると思うな。

串田 それが、そのうちに、実際にしていることと結びついてくるんです。

周郷 ずっと大昔を考えてみると、今みたいに本があるわけじゃなし、おじいさんやなんかの言葉を暗記したんだと思う。それを口でいっていると、経の文句みたいに心が安定するんじゃないかな。

串田 小学校四年ぐらいの時、教壇へ立って話をさせられるっていうことがありました。それには学校で使わないう童話なんかを覚えてって、それを皆の前でいうわけです。しかし四年ぐらいになるとともいやで、皆が笑うような話があったものです。特に今だったら、テレビなんか見えますから笑わせなくっちゃということが入ってくると思えますね。

周郷 この話も、さっきの茶巾しほりも、それかられんがの粉つくりも、みんないいですね。

★ 玩具・道具の氾濫

串田 遊ぶ道具っていうのが、卒業のころに中が空洞の積木がきましてね、それを積んで遊びましたが、あとは道具っていうのがなかったような気がします。たまに先生がひごと豆で……。

周郷 ああ、豆細工ね。

串田 そんなことぐらいでした。

周郷 それに比べて今はね、遊び道具が多すぎる。だからぼくは、あれじや遊びにならないっていうんです。今話の方がよっぽど遊びですよ。

串田 子どものころのことを考えてみると、上等な玩具をほしがったこともあると思いますが、それはなかなか買ってもらえず、よそのおじさんからもらっても親がとり上げてすぐには使わせてもらえませんでした。かえってその辺の木くずを、船の形をしている木くずを見つけたりと、大切に大

切で、うれしくてたまらなかったものです。

周郷 そんなことから考えると、幼稚園のへやの中もね、物が多すぎるんです。それから町には食品がいっぱいだし、デパートには品物がいっぱい。日本人が子どもをよく育てようと思ったら、ああいうのを少なくしなければだめです。

串田 鉛筆なんかでも買ってもらったものより、おもてで拾った傷だらけの鉛筆なんていうのが大事で……。

周郷 鉛筆なんかもあんまりなくて、運動会なんかでもらうとうれしかったでしょ？

串田 前に私は大げんかをしました。三菱鉛筆の広告か何かで、一本売りはしないでダースで売ることにしたと業者がいつているのです。一本売りの鉛筆が買えないことになったら大変なことになると思いまして新聞に書い

たら、業者が怒ってきましてね。それから鉛筆けずりっていうのがまたきらいでした。

周郷 ぼくもいやなんだ、あれ。入学祝いなんかにくれる人が多いんだ。それに電気鉛筆けずりなんて。

ぼくが最近落ちついたのはね、今までは小刀だったけれど、今の子どもは小刀でけずれないんです。あれ、きれいにけずるのむずかしいんです。鉛筆けずりはね、中華街で中国のを買ってきたの。自分で鉛筆をグルグル回すので、上に中国の人間がついてるの、これをいつも愛用しています。

串田 私が、知り合いの小学生をもったお母さんにききましたら、小刀は危いからもたせないし、学校には鉛筆けずりがあるというんです。この子たちは、ナイフをもたないで大学を卒業しちゃうんじゃないでしょうか。

周郷 ナイフというものはね、人間

の過去の歴史を考えてごらんさい、まさに人間になった喜びというようなものですね。おのとかナイフが使えるようになったというとは。

串田 ターザンが iba ばっていられるのはジャックナイフだけです。そのほかに何も無い、それであれだけの違いですから大変なものです。

時間がむだだなんていうかもしれませんが、鉛筆けずっている時に、いろいろなことを考えるわけなんです。昔は火鉢かなんかのところですね。あの木のおい！ あのおい、なつかしいにおいですね。

周郷 そう、木はね、炭火の中に入るといいにおいがあるんでね。香をたいてるようなもんです。(笑い)

★ 過保護

串田 私が外語にありました時、試験の立ち番をやらされましたが、毎年、

毎年父兄のついてくるのが多くなりまして、多い人はおじいさんおばあさんまでくるのです。そして学校は、私は反対したのですが、講堂をあけてお茶の接待をするんです。幼稚園かなにかならいいのですが、大学の試験をうけてきて、その頼みもしない人がついてきて、お茶を出すなんてとずいぶん反対したんですがそういうふうになっちゃいました。

やめる年に、本当にやめてよかったと思うのは、五月に履習カードを出すわけですが、それに親がついてきました。二年生か三年生が通りかかりますとよびとめるんです。この三人の先生の中でどの先生が甘い？ なんて親がきいてるわけです。学生のことですから「あ、これがいいです」なんていうとお前、これにしないさい」「はい」ってこんな所にいちゃ大変だと思ってやめ

ましたが、こういうのが会社へでも入って転勤だなんていうと、親が人事課へ行くんじゃないかと思いました。実際びっくりしましたね。

周郷 今年からはこの大学でも親は門の中へ入れないようにしました。

それで思い出しましたが、十年ぐらい前にアメリカからハルヒッシュという人がきていてちょうど春で、親がついてきているのを見て「何だ」っていいんです。中にはおまじないに梅干しか何かをもってきているっていいましたら、その梅干しの方には興味ももってね。アメリカでも試験のおまじないに兎の足をもつて行くんだそうです。

串田 ほう。

周郷 卒業式にもぞろっと親がついて来てね。前にそのころ本郷三丁目のところを通ったらそろそろ親がいるのね。ぼくらのころは親どころか本人も出なかつたりしてさ。

串田 卒業証書を取りに来いとあとから何度も何度もはがきが来て……。大学の時は研究室でまとめてとつてくれましたが、高等学校のはとうとう、ぼくは見ていません。

★ 魅力のある先生

周郷 串田さんやぼくらの学生当時、ずいぶんいろいろな面白い先生がいましてね。斎藤まこと、宇井伯純。

串田 宇井先生は面白かったですね。

周郷 ずいぶんいろいろなむずかしいことを知ってるなあと思いました。

串田 辰野先生の戯曲の講議なんていうと、先生がフランスで見て来た芝居の真似をするんです。それを見物に行つたものです。

周郷 辰野先生って人は、本当に、ぼくは講議きいたことないけども、魅力のある、見るからに学者というか、魅力ある人物でしたね。

串田 カンニングがきらいでね。本当におこりましたね。たばこも吸いたきや授業中吸つてもいいよつていっておられても、カンニングとたばこは違つていわれました。

周郷 辰野先生の話がでしたが、やはり東大といつても先生によりましたね。

串田 大学へ入つてから初めて講議きくにしても、前からの評判をきいてあの先生の講議をきいてみようとか。出(隆)先生の中世哲学なんていうのはぼく一人しか出てないんです。それと早稲田の学生で松浪信三郎とか……。

周郷 ああ、実存主義の。

串田 ええ、むこうは友だちをつれて来るもんで、本ものはぼく一人で、早稲田の学生が三人くらいでした。

周郷 出先生っていう人も、ふしぎな魅力をもった人でしたね。

串田 今でもお元気なんです。今年

の夏友だちとまいましたら、試験をされましてね。アリストテレスの全集かなんか、お前たちに教えといたはずだがつていわれましたね。

出先生の前では、学生時代からたばこはのんでましたから、たばこはのめますけれど、やはり、その先生の前でできない事があるつていう先生はいいものです。かたくなるような。

周郷 なんかあの、普通の意味じゃなくてかたくなるつていう、おかしがたいものを感じるとかね。

★ おそれ

串田 今の小さい子どもは、こわいつていうと何がこわいんでしょう。

周郷 お母さんたちと話し合つたところがあるんですけど、今ね、子どもはこわいものはないんだつていうんです。そりゃそういつてしまえば簡単ですよ。しかしこわいものが何もなくなつちゃ

ったんだな。だから何かぼくは今日の教育、幼稚園では特に、先生が一番大事でしょう？ 魅力のある、そしておかしがたいところのある先生が必要なんです。

いくつになってもこわいものがある方がね。実際はこわいものがあるわけでしょう。

ぼくは今年函館に行った時、北海道の幼稚園の先生からきつね火の話を書きました。その人は、敗戦後職がなくて、ご主人が材木の仕事をしていたんだって。いかにもちゃんと条件がそろってるでしょ、雨が少し降ってる夕方なんだな。するとね、ポツと一つ火がつくと、ポツポツポツポツと動いていくんです。そういう話をきいてると本当にぞーっとしてくるんだ。ぞーっとしてきながら楽しいんだ。

串田 楽しいですね、本当に。

周郷 河童なんていうのも、坪田譲

治の作品なんか、実によく書けていますよ。しかし、そういうものがなくなっちゃったんだ。

串田 怪獣なんて、ちっともこわくないんです。

周郷 どんなに人間が勉強したって、わからないものはたくさんあるわけですよ。こわいものがあるわけです。最近是人間が気味悪くなってきたんです。

串田 本当にそうです。

周郷 人間が気味悪いって気がしません。自分の中にもあるわけですよ。こわいものが。全部なくなってしまうたら、生きててもしょうがないですよ。

★ 無気力

串田 あのー、けんかをしなくなつた。往来でけんかをしているのを見かけなくなりましたね。よっぱらいのけんかは別として。

この間も順法闘争で、私のところか

ら都心へ出てくるのに一時間半ぐらいかかるわけです。いつもの倍くらいまってね。その中で、みんないららしているのかどうか、あきらめたような顔してね、まあ文句いってもしようがないでしょうけどもね。ぶつぶついう人、一人もいないし、こう、のび上がって体操なんかして……。(笑い)

周郷 本当にそうです。全部もうあきらめているんです。自分はもう何やってもだめだと思っちゃってる。で子どももそう思ってるの。だから、機械にはめこまれたようなもんでね。そして、実はそういう状態でこわいものはますます積み重なって行って、変になっちゃうんじゃないかと思うんです。

串田 電車の中で小さい子が乗ってきて、がちゃがちゃやって……。前にはね、変なおじいさんが、うるさいとか何とかいったんですけれど、今は何もいいませんね。

周郷 ぼくは園長になってから暫くの間ね、地下鉄にのると、子どもがあつちいつたりこつちいつたりするの。ここの子どもじゃなくても叱りとばしてやろうと思うけれど、乗物の中でそれほど勇氣なくてね。

いつか中央線に乗ってたら、三十五ぐらいの女の女の人なだけど、全部叱りとばしたの。尊敬したねー。そしたら静かになった。ぼくにはとてもできないけど。

串田 高校生なんか、一度あんまりすわり方がだらしないので、言葉ではいわなかったんですけど、ちょっときつく、つき出たひざをぐつとやったんです。そしたらね、あ、すみませんでした。っていつて、こつちがとまどつちやたんですけどね。だから、いわれたことがないんで、こうやってちやいけないことに、今気がついたのかもしれないんです。すみませんでした。

ってちゃんとおじぎしてね。

周郷 ただ足を出してるだけじゃなくて、ちゃんと腰かけてないのね、すわり方が。最後までおしりを入れとけばいいのに。

串田 また、今のいすはあの連中には低すぎるのかもしれないね。私たちが幼稚園のいすにかけてるようなもので……。案内変な格好しているのが全部変なわけでもないんですよ。

★ 素朴なもの

周郷 ぼくこのあいだテレビ見てたらね。成田の闘争をやった若者、毛を伸ばしたのが出てきたんです。で、発見したような気がしたんだけど。その百姓の人たちと一緒にやってやったわけでしょう、するとね、百姓のじいさんとね、話してると心が素直になるって、その若者がいつてるの。だから、何かそういう年とつちやつ

た人ときあうことで、若い人はむしろね、素直になるっていうことがあるはずなの。ところが大ていは、今の若いやつはしょうがないと思つてる、いえ何やられるかわからないと思つてる。本当はそうじゃないと思うんだけど、外に何もかぶさつてない、何か素朴なものにあこがれてるんですね。

串田 旅行なんかしても、お嬢さんなんか二・三人で行つてね、田んぼにいる農家のおじいさんなんかと話し合うなんていう、きつと面白いんですよね。

この間、ある会社の女の事務員なんだけど、旅先でいい顔をしたおじいさんが、おひつを作っているのに出会った。木曾かなんかを歩いてて……。それでね、おひつのこんな大きいのを三人とも買つちやつて、それかいついで旅行したんだそうです。うっかり買つちやつたっていうんです。安くもあつ

たんでしょうけれど、そのおじいさん、一日いくらもできやしないし、あぐらかいて仕事をしている。その前を通りがかりにそこで半日話しこんじやったらしいんです。

周郷 若者たちはね、そういう人にあこがれる気持ちがあるんです。

串田 そういう人にぶつかれば、あとは汽車がこんで印象が悪くても、満足でしょうね。

周郷 串田さんの書かれた随想やなんかを若い人が好きなもの、通じるものじゃないんですかね。

★ 本当の子ども

串田 いつか、子どもっていうものは本当に、ああいうものだと思うたのは、日光の鬼怒川のまた奥に手白沢っていう温泉がございましてね、それは本当の山の中の一軒やで、それも雪が降り出してから私が行ったんです。

そこに三つぐらいの、やっど口がきけるぐらいの子どもがいて、ぼくが夜おそくなつて入って行って泊めてくださいっていいましたら、「どうぞ遠慮しないで」って、その、炬がきつてあるんです。「そのまんまふんごんでください」ってちっちゃな子どもがいうんですね。

周郷 子どもがですか。

串田 ええ。子どもの言葉っていうのを全然知らずに育つてるわけです。炬ばたにあぐらかいて、そして親も別にその子に話すのに子どもの言葉を使わないわけです。翌日その温泉の湯元があるっていうんでぼくが朝行つてくるっていったら、「お前案内しろ」って、大きな親父かなんかの長ぐつばかばかはいてね、ぼくを案内するわけです。それで、いちいちね、「この石すべるぞ」なんてやるんです。(笑い) 枝がこうあると自分で持つて、「これ、はねるぞ」

なんて、案内するのがうれしくてしょうがないんですね。休んで一服すると本当に小さな豆ぎせるなんか吸つてもいい感じなんです。

その子どもの後日談で面白いのは、小学校へ入るので鬼怒川のおじいさんの家へあずけられて、まず床やへ連れて行かれたわけです。それで床やが、「どういうふうに刈る？」っていったらね。腕ぐみして、「虎こに刈つてくれ」っていったそうですよ。山の中でしょっちゅう親父さんにとら刈りにしてもらってたんですね。床や、びっくりしただろうと思えますよ。小ぢやなくせに全部おとななんです。みんなわれわれおとなが、子どもに言葉を教えてるわけですね。

周郷 そう、人生観までね。

串田 私の子どもが戦争中、家が焼かれちゃって山形の農家にやっかいになつてたんですけれど、一年半ほどし

て、四つと三つでしたが東京へ戻って来ました。そして上野へ着いて、地下鉄へ乗るんで人をかきわけかきわけ歩いたんです。

「東京は人間ばっかりだ、どこまでいっても人間だ」っていうんです。

周郷 しかしそれ、実に詩みたいでいいじゃないですか。

★ 自然と人間

周郷 串田さん、レイチェル・カーソンで知ってますね、カーソンが子どものことを書いたのがあるんですよ。やっぱり小さい子どもはね、団体で行っちゃだめだけど、少数で山を歩かせたおとなと話していると、その歩いた道から、植物の名前まで、全部覚えちゃう、そういう能力があるんだそうだ。

串田 ああ、そうかもしれません。

周郷 一方ではこう、やみのこわさっていうのか、ぼくはそれをやってみ

たいと思うんだけど。

串田 昔の試胆会とかね。

周郷 そうそう、小さいとこわさがよくわかるんですよ。日本の大都会っていうのはこういうふうになっちゃってますからね、そういうことをやらなきゃならないんです。

ぼくは、一人前の人間になるというより、まっとうな人間になることの方が大切だと思うんです。一人前っていうのは世間に対する考え方で、何も世間に合わせなくていいんです。

串田 私も三人子どもがいますけど、こっちは元氣だったものですかから小学校へあがる前から山へ一緒に行きました。それで、小学校へ入ってからかな、野宿なんか一緒にしました。そうすると、今度自分たちだけで行っても、山へ行けば野宿するもんだと思つて……。

周郷 そしてやっぱり、夜明けの海だとか、山の夜明けっていうものね、

見ると二歳でもそういうもの、わかるっていいですね。ま、ちょっといいすぎかもしれないけれど。

で、カーソンのその本の終りの方に、子どもの時そういう経験をしてると、ととつて退屈しないっていうんです。ととつても自然は無限にあるんですから……。

串田 大体、東京に自然がなくなつたなんていうことをいってるのは、そういう自然を見ずに育つた人で、ぼくはよくそれをいうんですが、四谷から赤坂まで歩いてみると、今も何百種類の草が土手にありますしね。気をつけるとちようちよがとんだり、銀座あたりでもちようがとんでることがあるんですよ。ああいう並木に卵を生んで、どこでどういうふうな死ぬかもしれまんけれどね。

おととし、あかたてはがあの、銀座の四丁目、どうも尾張町ってい

てしようがないんですけど……。

周郷 ぼくら、尾張町だな。

串田 尾張町のとこをとんでるんです。そこでぼくは、どこへ行くかと思つて見ても、まわりの人はただ歩いて目に入らないんですね。ちょっと珍しいなと思つて、ああいう近所に行たら、銀座のちようでも調べてみたいなつて思いました。

一度、銀座の野草は調べたことがあるんです。四十八種類ばかり。京橋から新橋までの表通りと裏通りだけを調べまして、京橋の共同便所の裏あたりが一番あつて（笑い）うっかりしやがみこんでち漢か何かに間違えられて、留置場に入れられても困りますが……。その時にまだ、新橋のところにトタンを立てて人が住んでましたが、その掘割のところ松葉牡丹が生えてるんです。どこからか種がとんで来たのかなと、さくを越えてそれを見ました

ら、トタンの中から顔がニユッと出て、それはおれんだからとっちゃいけないうつて。

周郷 その中に住んでたんだな、焼跡に。

串田 とるんじゃないんで、あんまり珍しくてきれいだから見せてくれていつたら、うれしそうに顔をクシャクシャにしてみました。

周郷 そういう人の方が、一本の松葉牡丹を頼りにして生きているようなところがあるのね。

★ 本当の日本

串田 悪いんだけど、夕方でも東京駅から出てくる人を見てると人間のような気がしなくてね。ま、その人たちだけなら人間かもしれないんですけど、ちようどそこにしるし半天を着た水道直しの人が歩いてビルから出て来たんです。そしたら、これが人間だ”

つていう気がしたんです。それこそ、はだかになると背中ほりものでもしてあるようなね。そういう人たちと話してみると面白いことをいうしね。

周郷 変なことを思い出したんだけど、三年ばかり前、ぼくヨーロッパから帰ってきた時、向こうは空気が、きれいでしょ、東京の空がきたないんだ。それで今度、小田急に乗つて家まで帰る時、ちようど秋で、日本へ帰つて来たんだなつていう気がしてきて窓から見てたら、彼岸花が咲いてて、また少し行くとそばの花が白く、ざーっと咲いてるの。ああ、そばと彼岸花、これが日本だなつて思つたな。

串田 私は、中学の時義兄について南京に行っただけで外へ出たことはないんですけど、あの宗谷が燈台を回る時、雑誌社に頼まれて、外側から日本を見ました。しかし外側から見ると日本もきれいですね。長崎から海

を回って、台風に追っかけられたりして三保の関まで来たんですけれど。自分の家も、時々おそくなってせかせか帰るといふんじゃなくて、外から眺めるっていうことも必要ですね。

周郷 人間というものはね、他の動物と違って人間らしく見えるというのはいふことじゃないでしょうかね。そこへもぐりこんじゃうんじゃなくて、外側から見れるっていう……。

★ 雲花・山

周郷 ぼくはね、雲なんかも、都会のまん中でバスなんか待ってる時、見るのも好きです。モクモク上がってきて、また早いですよね。そして太陽がかくれたりすると光線が実にきれいなんです。普通、やたらに見れないもんですよ。夕陽なんかもそうだけど、新宿なんかで一生懸命見ると、あいつ何してるんだろうと思われるんです。

だけど沈むまで見たくなっちゃう。しかし、そういうことやってる人、あまりないね。

それから、まだやりたくてやれないんだけど、山の中のどこかに、一本咲いてるっていう桜、ぼくはそれを春になったら見に行きたいと思う、それはきつと、もう都会にはない桜だと思ふの。

串田 前にぼくは、黒部へ黒百合を三日がかりで見に行ったことがありますが。多分この時期に咲いてるだろうと思つて。前に教わつたところが岩の角からちょっと曲がったところで、気になつて気になつて仕方なかったんです。まあほかへも行きましたが、その時の山旅の動機は、それだったんです。周郷 そういうことが、気にならないければいけないのよ、三日かかったつて。それ、ぼくがやりたくてやれないことを串田さんがやっていたらわけ

だけれど、ぼく十年くらい前に、寝袋をもつて山へ行きかけた。ところが心臓が悪いもんだから、そのまんま死にました。死んでから考えてやめました。

串田 あんまり高くないところへ、今度停年になられたら、記念に一つ一緒にいかがですか。(笑い)

周郷 どうぞよろしくお願いします。串田 今は、ツェルト・ザックについて小ぢやかなる簡単な天幕みたいのがあるんです。それを使って寝袋にでも入つたら冬でも寒くありません。先生、そんなところへいらしたらうれしくなっちゃつて一晩寝ないで、なんてことになるんじゃないか。

周郷 全部が暗くなって、星がさうと見えて、世界におれ一人っていう感じ……。

串田 一度野宿すると、本当に熟睡できるような気がします。島々谷で一人で野宿した時なんか帰ってきて、今

年は谷は熊が多いってことだが”って、いわれてああそうかと思いましたがね。先にいわれてたら行かなかったかもしれません……。(笑い)

「いたちやなんか多いんです。がさがさいうんで懐中電燈をつけてみると、いたちがキョトンとした顔でこっちを向くんです。」

周郷　きれいでしょ、いたちの姿っていうのは。

串田　ええ、きれいです。そしてえらく早いです。朝、寝袋の中にいると兎がかけてくるんです。いたちにおいかけられるんです。それをちよっとじやましたり……。

このごろは島々からみんなバスで上高地へ入るようになって、またこのごろ少し歩くようになったようですが、久しぶりで行って道がなくなってしまうました。やっと川に出て丸木橋をわたって、その真中で、夜半の一

時ころです。電池がなくなつてとうとうそこで、しぶきのかかるようなところで寝たこともございます。

笹子峠なんか人が通らなくなつて、あそこはいいですよ。この間なんか、サルに十何頭出くわしました。みんな動物があそこへ集まっているようです。上から石を投げるサルがいてびっくりしました。われわれはちん入者なんです。

周郷　フランスでは教えるそうだけれど、われわれは動植物界の市民なんだそうだ。そして言葉で教えるだけじゃなく、じかに自然保護の活動をさせるんだそうだ。動植物界の市民だから、それを尊重して、義務を果たさなければならぬわけです。サルはサルで、人間が方々を荒らしたからそこにいるわけで、そこを荒らしちゃいけないわけです。

串田　ほかの動物はみんな、住み分

けということをやつてますね。人間だけが寒けりや火をぼんぼんたいて、本来なら住めないような所にまで、ちゃんと住んでしまう。

★海

串田　お目にかかりたいと思つた方にやつとお目にかかれました。でも考えられませんね、小さい方々と海へ行かれてその帰りにここへいらしていただけるとは……。

周郷　ぼく、今日海でも感じたけれど、テレビで見た海亀のこと。もとは茅ヶ崎あたりの海へもきたそうですね。海亀の子どもはみんな海へ向いて、向きをおしても、なおしてもまた海の方へ向く。何で海へ向くのかはなぜであるっていうんですね。

そして海亀の子は十五年くらい北太平洋からずっと回つて帰つて来るんだって。渡り鳥もふしぎだけれど、あ

なのろのろしたやつなあ。卵を生む時のお母さんも大変なんだ。用心深く場所を探して、ため息ついて生むんだ。ぼく、尊敬しちゃってさ、こんなすばらしいものいるのかと思って、四十分ばかりえらく感激しちゃった。

こんな小さいやつが、何を信じているのかなあ。生命っていうものは、どういうふうにできるものなのか、何に反応しているのか、今日ぼくは海でその事を考えてました。そこへいくと人間なんて行動範囲がせいまいんじゃないかしら。

串田 海の波打きわっていうのは何か、子どもがかけ出しながら、こう、ゆれてね。しばらくぶりで海岸へ行く。と自然にああいうふうになりますね。

周郷 それは、自然が人間に呼びかけてるのに反応できるんですよ。

今日海で、岩の方々に穴になってるところにはぜの小さいのや、えびがい

るの、それとってきんだけれど。ともかくあの子どもたちに魚をつかまえさせるということ、海につながってる魚なんだ、ぼくはそれやったんでとても満足なんです。

いそっていうことも考えたんだ。いそって、実にいろんなものがあるんですね。みんな生きてて、岩について、ここまで波が来ることを信じるんだな、ずっと乾いちやうなんて思ってない、海を信じてるんですよ。陸と海の境のところに生命があるんです。

串田 いそって本当に面白いです。あのふな虫なんていうの、あれは海に落ちると死んじゃうんだそうですね。あんなにしぶきがかかる所に住んでいながら、泳げないんだそうです。ずいぶんきわどい所に生きてるもんだと思います。人間だって同じなんですね。しばらくは泳げても、ずっとは泳げないですからね。

周郷 さっきの海亀も、岩礁のところでひと休みするんだって、そこへ行く仲間も待ってるんだって、人も来ないし。だから江ノ島なんて来たわけですね。ちゃんとそうやって生きてるなんていいなあと思って、尊敬するばかりです。

★ 創造のための後退

周郷 ぼく、昨日読んだんだけど、ケストラーの「アクト オブ クリエーション」創造の原理と記してありますが、創造のための後退”ということが出てくるんです。これはいい言葉だと思って今日、いそで考えました。

野性でも何でもいいんですけれど、作曲でも創造でも、本当にやった人は、競争してやったんじゃないかな。日本後退してやったんじゃないかな。日本人はもっと植物や動物にもどって、あるいは子どもの心にもどって、そこま

で戻ると競争をこえちゃいますよ。競争は必要ないの、それこそ本当に創造ができるという考えがあるんです。これはね、日本人が一番きびしく学ばなければならぬことです。今こそ後退しないと、死んじやいますよ。

幼児教育なんていうのも、その後退する場所にしなければいけないんです。もうちよつと勝手な想像をすると、中国があとこまできたのも、後退してらんじやないかな。

串田 昔話をして、昔はよかつたっていつて笑われますがね。私の友人にもいつそのこと何年か前まで戻さなきゃという人がいます。

でも去年からですが、小金井市で殺虫剤をまかなくなりまして、まづくもがふえましたね。それから今年は虫が非常に多くてがちゃがちゃなんて、テレビがきこえないくらいです。ちよつと手加減すれば戻ることができるんで

す。

今出がけに、上高地について具体的に、何か書くようにといわれたんですが、二年、三年、人を入れなければいんです。上高地を一度上荒地にする必要があります。自然の荒地です。お互いに何とかしなければならぬと思います。

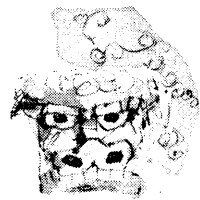
周郷 それぐらい、人間はがまんしなくちゃね。

今日は、本当にぼくらが考えていたことの方向づけになるようないいことを、いっぱいいきかせていただきました。茶巾しぼりなどさっそく実行したいことですが……。本当に楽しい話でした。

(昭・四七・一〇・五)

山の随筆、私の博物誌などでおなじみの串田孫一氏と周郷先生に、新春対談をお願いいたしました。串田氏は、お茶の水幼稚園のご出身でもあり、この対談は園長室の外がまっ暗になるまでつづいて、時間があればもっともつとお二人に話していただきました。と、心を残しつつ終りました。(赤間)

一九七三年を迎えて



折原祥子

開園のころ

丹沢大山連峰の見える丘の斜面の新興住宅地、四百坪ほどの土地に、本当に小さな幼稚園を建てて、六年余りになろうとしている。園が建ったころは、家が二、三軒しかなく、回りの造成地にススキが茂り、かわい野性のスマイルが咲き、田んぼには、オタマジャクシがいっぱいだった。

開園当時は、十名ほどの子どもたちとススキを飾り、おだんごを作ってお月見をしたり、夏休みには、園庭で、近所の小学生も一緒に、キャンプファイヤーを楽しんだ事など、なつかしく思い出される。その子どもたちももう今年が六年生、五年生になる。子どもたちの成長を見て、早いものだとつくづく思うのである。

私の所で幼稚園を開園したのは、「家族みんなで力を合わせて何かをしよう」という母の提案からだったと思う。サラリーマンの父と、小学校で教えた経験のある母と、伝導所の附属幼稚園に勤めていた私。そして妹が二人いるが、ひとりには織物を専攻し、ひとりは日本画と、各自好きな事をしていた。その家族が、何かの形で協力していけるものは？ と考えた時、戦後川崎の焼け野原に立って「ここに幼稚園を始めたら……」と考えた事があるという母の考えと、私の「小さくて夢のある幼稚園で、自分の思うような方法で保育を試みたい」という夢がはからずも一致した。そして、何のむずかしい事も考えずスタートし、偶然、土地もすぐ見つけたり、不思議なほどスムーズに開園してしまっただのである。

それから六年の間、家は建ち並び、ススキの野原も次々に

くなっていくが、自然は、まだまだ残されている。

春にはタンポポ、スマレが、庭園のすみに遠慮がちに顔を出す。子どもたちは、大切に大切に、石でかこいをつくる。ふまないように……と。

夏には、近くの神社の杉林の中から、セミの鳴く声がにぎやかに聞こえる。子どもたちの好きな、カブト虫クワガタ虫も、アゲハチョウもオニヤンマも、まだまだ見られるのはうれしいことである。

秋にはコスモスが咲きみだれ、道路にトンネルのようになり、ドングリはもちろんの事、園の近くで梨がり、くりひろい、おいもほりもでき、自然の実りを充分感じる事ができる。カマキリ、バッタも、保育室にとび込んでくる。それもみんな子どもたちにとっては友だち、そつと草原にもどししに行くようすも見られる。

冬には、丹沢が雪をかぶり、山肌がくつきり見られる。子どもたちと帰り道に、あまり美しいので立ち止まり、ながめる事がある。

家が建ち並び、都会的なふん囲気の中にも、こんなに自然が残されている事は、私たちにとつて、本当に恵まれている事なのだと思う。これからも、少しでも自然が失われないようにと

祈るばかりである。この様な環境の中で、三年保育から、一クラスずつ、八十名の園児が、四名の先生と共に生活している。

今までの歩み

幼児教育の道に入って、今年で十年になる私だが、年は過ぎていくものの、常にいろいろな問題にぶつかり、年々教育のむずかしさを感じるだけで、少しも進歩せず、いつも一年生の様な気持ちで過ごしている。

年長組を受持ち、子どもと接する事が一番楽しい私なのだが、時には、経営者の立場から、ある時は園長の立場から……といろいろな問題が出て来る。そのたびに、何でもぶつかつて、やるだけやってみようという気持ちで解決してきている。

私は、ある大学の先生ご夫妻が、キリスト教伝導のために開いた幼稚園を手伝い、日曜学校の子どもたちと接していた時に養われたいろいろの事が、今、どんなに役立っているかを、つくづく感じる事がある。そこは施設も貧しく、幼稚園としては、決して恵まれた状態ではなかったが、子どもたちひとりひとり人間として接し、大切にし、何をする時も、子どもを中心に考え、先生も子どもも感謝の気持ちをもって生活していた。また、何でも工夫する事をし、ないものを作り出していく事も学

んだ。もし、設備の整った大きな園で、自分の受持ちの子ども中心に考え、保育していればいいような園が、私の基礎の場であつたなら、決して、今、幼稚園を進めて行く事などできなかったと思うし、私にその様な力もなかったといつも思っている。

自分の思つた事をしてみたいと思ひ、建てた園であるが、理想的な幼稚園でどんなのかしら？……と考へれば考へるほどむずかしい。施設の事、内容の事、いずれもこれでいいという型がないような気もする。自分たちに与えられた環境、状態の中で、力いっぱい努力する事が一番大切な様に思う。中心は子どもなのである。ひとりひとりの子どもが楽しく生活できる場である事、そのために、家庭でもできる努力をし、保育者と力を合せて、初めて子どもにも良いものが与えられる。そんな幼稚園でありたいと思う。

この様に小規模な園であるから、卒業しても園とのつながりが密接である。毎週一度は図書を借りに来る子、学校のような報告に来る子、毎朝、声をかけて学校に行くのが日課になっている子、運動会の時など、「リレーの選手に選ばれたから、絶対応援に来てね」ときそいに来る子どもたちである。お母さま方も、小学校に行つてからのようすを知らせに来てくださる。

「あんなにメソメソしていた子が、入学式の次の日、歌を歌

える人といわれて、手をあげて、自信満々で歌ったんだそうですよ」などうれしいニュースがたくさん聞けるのである。

昨年は、卒業生の高学年を十五名ほどつれて、丹沢にキャンプに出掛けた。自然の中で、のびのびと過ごす姿の中に、幼稚園時代のひとりひとりの姿を思い浮かべた。

おしゃべりだった子は相変わらずおしゃべりで、ユーモアのある子も、てれやの子も、少しも変わっていない。しかし、それの子どもが素直でのびのびと、自分のもっている物を表に出している姿を見て、本当にうれしく思った。今年も行くのだと、今からはりきっている。幼稚園にいる二年、または三年だけのつきあいではなく、卒業しても幼稚園を思い出してくれる様な、家庭的な園にしていきたいと思う。

一九七三年を迎えて、あらためて思う

子どもたちには、与えられた物ばかりでなく、自分で考え工夫し、作り出していく事の楽しさを知ってほしいと思う。

また、何か問題にぶつかった時、勇気をもって立ち向かう力も持つてほしいと思う。

どんな子どもでも、ひとりひとりを見ると何かしらいいものを必ずもっている。思いやりの深い子、たくましい子、……

やさしい気持ちの子、めんどろみのいい子、本の好きな子、何かを作る事の好きな子など、いろいろである。どんなに小さな芽でも、いいものを見つけて、のばして行く事が、幼児教育にとって大切な事ではないかと思う。子どもたちの持っているこの小さな芽は、今までの生活の中から、自然に育って来たもので、口で教えられたものではないのである。

最近特に感じるのは、子どものまわりにいる大人の人間性の大切さである。両親はもちろんの事であるが、保育者自身の人間性がどんなに子どもにも影響するか。だからこそ、子どもに教えるのではなく、一緒に学んでいく事が大切なのではないだろうか。保育者も人間として、常に学ぶ気持ちを持つ事、そして、自分自身の幅を広げ、深さを増して行く事に努力をし、子どもたちと生活して行けば、子どもたちに少しでも、いいものを与えられると思う。また、子どもたちの中から保育者が学んで行く事も多いと思う。やさしさ、思いやりなど、「こんなわんぱく坊主に、こんなやさしい気持ちがあるなんて……。一生変わらなず持ち続けてね」と思う様な場面がいくらでもある。そんな時、自分自身を反省するのである。

子どもと一緒に考え、努力し、共に喜べる様な保育をこれからもしていききたいと思う。保育者として、こんな方法でいいの

しら？ と迷う事は常であるが、ある時には、自信をもって事にぶつかり、ある時は素直に反省して行く事も大切ではないだろうか。

幸い私のそばには、いろいろ注意してくれる、畑ちがいの者がいる。

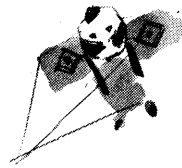
「幼稚園の先生って、まじめ過ぎるほどまじめな人が多いだけけれど、考え方が狭いみたい」「何でも経験したり、見たりして、物を広く見られる目を養う必要がある」などと何かにつけて教えてくれる。そういう時も、自分のあり方を考えさせられる。

これからも、もっともっと大きな問題にぶつかる事もあるだろう。まだ気づいていない問題もたくさんあると思う。努力を惜しまずに、今年もがんばって行きたい!! 少しでも進歩のある事を祈って。

(松ヶ丘幼児園)

一九七三年を迎えて

— 保育新論 — を思う



相馬誠子

幼児教育が、人間の基礎教育であり、最も大切であることは、昔から多くの幼児教育者たちや、それを理解する人々の間で叫ばれてきた。そして今日になって、ようやく社会全般にみとめられるようになったことは、幼い子どもたちにとって、この上ない喜びである。

しかしながら、どういう方法がよいのかということになると、いろいろな考え方があり、親も教育者も、混乱しがちな現状ではないかと思われる。

この時にあたり、私は再び、故倉橋惣三先生の教えをかみしめてみたい気持ちになった。特に日本が民主社会に一八〇度の転換をした時の民主保育についての話である。

あのころ、昭和二十一年の夏、故倉橋先生の講話を聞きたい一心で、身動きもできない夜行列車にゆられながら名古屋から上京して来た私であった。お茶の水の遊戯室にひびく、先生の「保育新論」の一言々が、再び幼児教育者として立ち上がるうとする人々の心にしみ通っていった。以下、それらをここに紹介したいと思う。

民主保育とは —

幼児は元来、非民主的な点を一杯もっているが、一方には、人々に親しみをもつ心、人を信じる心、人を敬する心をもっている。これらは、交換条件（信頼すると間違いないから、価値

があるから尊敬する、など）があるからではなく、人間味に対して親しみ、人間だからこれらの気持ちをもつのである。この人間性に対して、人間教育が生まれるのであり、人間教育が保育の目的であり、民主保育なのである。

人間教育の三点

- (一) 生きている「生」
- (二) 個において生きている
- (三) 社会的に生きている

(一)生きているとは

民主生活は実に生き生きしている。そしてそれは、発表、実行の条件をそなえている。単なる人のいったこと、したことのくり返しではなく、独創的なものであることが望ましい。

幼児期は、発表的、実行的であるから、これを妨げないようによすれば、特別に指導をしなくてもよい。

(二)個において生きているとは

個々というものを自覚するのは成年期である。幼児期において出る個というものは、自分さえよければというわがままにすぎない。しかし真の個というものもそろそろ出始める。四歳は四歳、五歳は五歳としての真の個を大切に、怠

りなく、注意して育てていかなければならない。

本当に幼児の教育のできる人は、真の個を本当にいかしていく人である。真の個とは自己を尊重し、同時に相手の個を尊重させることである。個の確立しない生活は実に無価値である。ではどんな所に個の確立した生活があるか？

幼児としての実際面を考えると、次のようなことがいえる。

1. 自他の区別をはっきりする

これは、個の発達していく上での実際面である。今までは、自他の区別ということをも、所有権とか、物の整理という意味において論ぜられていたが、民主主義において、自己をはっきりさせるということは、個の発展のためにも重要であり、座席においても、持物においても、はっきりさせることが大切である。

2. 自己に責任をもつ生活をさせる

自発的な生活が行なわれている中でも、責任をもつた自発である場合に、真の個が育てられていくのである。やりっぱなし、甘ったれは無責任である。やる気になって玩具を出して遊んだあとは、もとの所へ片づける責任がある。またないから片づけるなどという単純なものではない。貴方が出したのだから貴方がしまわなければならないというように責任を

もたせる。

保育者の言葉の使い方により、その意義が根本から異ってくるから、よくよく考え、軽はずみない方は慎まねばならない。

この責任という意味において、民主主義はきびしいのである。だからしない生活は自分の生活に責任のないことである。

3. 有難うの気持ちを強調する

民主主義は、意見を主張し、いかにも味のないもののようなであるが、有難うは、民主主義の純粋なものである。

自分ですべきことを人がしてくれたのであるから、個の責任において、確立の上において、感謝の気持ちが起こるのが当然である。

4. 人を馬鹿にしない、批判しない

民主的生活においては、同じ人間同志、あなどり、みくびることはよくない。

ここに『つげ口』の問題が、実際面として出てくる。

◎『つげ口』に対して、どう処するか

人を批判し、つげ口をすることはよくない。しかし批判と正しい判断とは、またちがう。

例 A子がB子の紙をとったので、B子がつげ口に來たとする。

その場合のA子に対する扱い方に留意したいが、それはA子の性質によって方法を考えるべきである。

(1) A子が、つねに人を非難し、告げ口に來る子どもである場合忙しそうにして聞きのがすのも一方法だが、いつもそれではいけない。A子に、人の気持ちを察する心を育てていくようにする。

「Bちゃん ほしかったのね」と同情のことばをかけ、A子の心を動かすようにする。

(2) A子が、道徳的な判断を求める気もちが強い場合

「それは、いけないことね」といい、人を責めずに、やったことを責めるようにして、人を傷つけないことである。このような問題に対する精神的分解は、デリケートであるから、その時々に応じて判断し、考慮していかなければならない。

(三) 社会的に生きているということ

人間が生活していく上において、個と個の関係だけでなく、社会の中の個が考えられる。幼児期にはむずかしいが、幼児期らしい形でやることができるのである。

社会の中の個を育てるための実際面として次のことがいえる。

1 人に迷惑をかけない

社会にいるかぎりには、社会の中の個としての役目がある。それを守らないことは人に迷惑をかけることになると同時に、自己の役目を怠ることになる。日本人は、人に迷惑をかける感じに鈍い。もしかけたなら、ごめんなさいの気持ちで、社会生活を生きていかなければ民主的ではない。

2 礼儀を重んずる

自由の尊重から、しつづけを無視することはいけない。民主主義においては、個としての発達社会の個としてのしつづけを重んずる。どうやってするかという方法を考えることより、どういう根本精神でするかと考えることが大切である。

根本になることはといえば、今まで話してきたことが、いわゆるしつづけの根本になるのである。

しつづけの根本として考えられること

- 自他の区別をはっきりする
- 自己に責任をもつ
- ありがとうの気持ちをもつ
- 人を非難しない。
- 人に迷惑をかけない。
- 礼儀を重んずる

これらの根本精神から当然生まれにくるところのしつづけを大切にす。

従来の教育は、何か他に目的があり、そのために役にたつための教育であった。

今日の教育は、人間尊重を究極とする教育であり、人間なるがゆえに、人間として教育するのは当然の摂理である。

貧乏な人も、知能の低い人も、身体の不自由な人も、人間なるがゆえに、人間になるよう教育するのである。出世が目的ではない。教育の基の基の幼児保育において、この人間教育は喜ばしい。

人間が人間になっていく喜びを、充分味わい得る人でなければ、この教育はできない。指導者の人間性にまつのみである。

以上、二十六年前の保育理論を、現代において再び考えて見た時に、その根本精神は、そのまま生きるものであることが、はっきりわかる。

しかしながら、めざましい経済成長にともなうて、その社会の中にあつて、教育の果たす役割は、何であつたのであろうかと考えさせられることは多い。もし人間らしさをなくしてい

たとしたならば、ここで再び、人間に立ちかえり、自然にかえり、心を育てることに、真剣にとりくまなければならぬと思ふ。

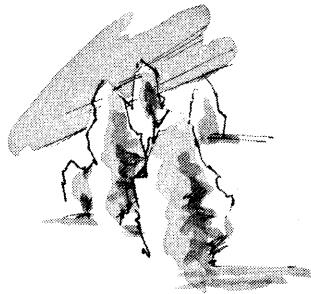
どういう人間に育てるか、親、教育者、社会の責任にかかっているのである。特におとなの社会が、子どもに与える影響は大きい。みんなで考え、いかに人間らしい生活を送るかというところが先決問題ではないだろうか。

幼児のいきいきとしたまなざしに接し、心からの楽しい叫びを耳にする時、子どもたちへの責任をひとお強く感じるこのごろである。

私は、子どもたちの素朴な遊びの世界を大切にし、互いのふれ合いの中で、たくましく、幼児として生きる喜びを満きつさせながら、自主性、創造性を発揮させるとともに、人の気持ちも、幼児なりに思いやれる心、感謝の心を折りにふれて、育てていきたいと願ってやまない。

『教育は指導者の人間性にまつのみである』と結んでいる、この民主社会に切り替えられた当時の、倉橋先生の『保育新論』は、今日、そのまま、私自身の生活の指針としてもいききているのである。

(江戸川区立鹿本幼稚園)



子どもの生きがい



松隈玲子

「子どもの生きがいってどんなことかしら」と何人かの
人にそう問いかけてみました。

ある人は「そうねえ、一口にいうと、子どもが成長する
こと、大きくなること、もう少しわしくいうと、大きく
なるんだと期待する気持ち、大きくなったなと気付く気持
ちの両方だと思う」と大変明快に答えてくれました。また
ある人は、「子どもの生きがい？ そんなものあるものか、
小さい時から、生きる意味だの、生きがいだの、そんなこ
とを考えて生きなければならなかったら残酷だよ」と面倒
くさそうにいました。

子どもの生きがいをどう解釈するか、それは大変むずか
しいことであるかもしれません。けれども、子どもにだっ

て、与えられたいのちを、生き生きと躍動させるゝとき”
をその育ちゆく過程に、しばしば体験することがあるよう
に思います。

日々の子どもの生活の中で、子どもの心が生き生きとは
ずむその時を、感じとめ、うけとめることから、生きがい
をさぐりあててみたいと思います。

ぼくの生きがい

「ねえ、潤ちゃん、生きがいって何だと思う？」小学校
三年生の息子にいました。

「生きがい？ 『ああ、生きていてよかったと思うこと』
だよ。ママ、知らなかったの？」

「さあ、わからない」という答えを予想していた私は、幼い幼いと思っていた息子からの意外な返答に驚いてしまいました。

「ああ、生きていてよかったなんてよくそんなことばを知っていたわね。じゃあ、その生きていてよかったというのはどんな時だと思う？」

「ママ、この前テレビであったじゃない、老人の生きがい、生きていてよかったっていうのがね。おじいさんになるまで生きていたから、孫が買ってくれたテレビも見られるし、食べたいなあと思っていた、アイスクャンデーを毎日でも食べられるし、ぼくは、生きがいてのは、その人のしたいことができたり、ほしいものがもらえることだと思うから、ママみたいに、そんなきき方しても答えられないな。だって、生きがいてのは一人一人みんなちがうと思うし、それにおんなじ人だっていつも同じ生きがいなんかもっていないと思うから」

「わかりました。じゃ潤ちゃんの生きがいていうのを聞かせてよ」

「ぼくの生きがい、そうだなあ。給食に時々だけドミツマメができることと、毎日十円のおこづかいを、ずっとため

て、あと十六ねたら、変身サイボーグの部品が買えること、ぼくの大好きなおもちとソーセージとおすが一ぺんに夕ごはんに出ること、ええっとそれから、一ぺんには思いつかないや」

「生きがいて思いつくことなの？」

「まあ、いいじゃない、ママ。かたいこというなよ」

親がどきまきさせられるような、理屈っぽいことをいうかと思うと、自分自身の具体的な問題にかえてくると、とたんに、人生とは食べることばかりが目的みたいな、なんとも幼いことばになってしまふ息子を見ると、現代っ子の特徴がよくあらわれているような気がしますが、子どもの生きがいとは欲求の場の中に芽生えたプラスの誘意性にむかって突進すること、そのものを獲得するためには、全精力を惜しみなく費やすことのできる状態といってもよいように思います。

ですから、大人の生きがいのように遠いかなたの希望に向かって精進したり、わが子の成長の過程をみるように徐徐にもたらされる喜びをたのしむというのは違って、直観的で、しかも、目的に向かってまっしぐらにつきすすむ時には、他の事象は一切意識の中になくなるという特性を

備えているのではないかと思えます。

そしてそれは、年齢の低いほど、一つのものに対する持続時間は短く、しかもしばしば反復される特徴をもっているようです。

積木のおぼっし

次男の協が二歳のころでした。積木を五つほどつまあげ、一番上に、プラスチックのお皿をかぶせると重心がかたむいて、積木はバラバラにこわれてしまいます。何度も何度もくり返して、やっとうまくのつたのを見て、「うまいうまい」と自分で手をたたいていると、「おうちが帽子をかぶったね。うまいうまい。おうちがカッコイイってよろこんでるよ」とパパにほめられました。

その時から、毎日毎日、あくことなく、五つの同じ積木と、赤いプラスチックのお皿のおうちづくりがはじまりました。

朝、目がさめると「ママ、おうちおぼっししてあげるね」がはじまり、夜、おやすみなさいの時間を告げられると、「おうちおぼっし一ぺんしてからね」まで、多いときは一日三十六回もの記録をつくりました。そのうちに「おちやわ

んおぼっし」「おくつおぼっし」「クレヨンおぼっし」と何にでもお皿をあぶせることに発展し、食器棚あらしに手をやいて「かわいいクレヨンの帽子をつくってあげましょう」と折紙で三角帽子をつくってやると「かわいいお帽子できたねえ」と大喜びで、一日中クレヨンの箱を出してきて、帽子をかぶせたりぬがせたりして遊びました。

ところが、次の日から、「ママ、おくつお帽子ピタリしてね」「ゴジラお帽子にやう（にあう）してね」と、そのものに丁度あう帽子をつくれとせがみはじめ、つい、炊事で手が離せない時「どんなのがにあうか協ちゃん考えてあげて」というと、「うん、ゴジラどんなお帽子にやうかねえ、ゴジラに聞いてくるからね。すぐ帰ってくるからね。ママ、ちょっとまってね」とおもちゃ箱のゴジラめがけてすっとなでいきました。

「ママ、ゴジラがね、やっぱし（やはり）あおいあおいのがいいって」目をきらきらさせて告げにきていた姿を思い出すと、そのころの、帽子にあげ帽子にくれた協の一日は、父親にほめられた喜びの再現をもとめてあくことなぐくり返され、一つの流れをもとにして、次々にきっかけをつかまえては変化し、発展していくことであったように

思います。朝めがさめて「今日も帽子で遊ぼう」と思うその時から、「あしたは、もっとステキな帽子をママに作ってもらおう」と思って眠るまで、幼いながら、その生活のすゝめの活動の源となった「ぼうし」は、協の生きがいであったといえましょう。このことを通して、子どもの生きがいも、より高いものに発展させていくためには、親と子のかかわりあいを大切に考えなければならぬということをお伝えされたような気がします。

お誕生 おめでとつ

協の四歳の誕生日も間近なとき、六年生の姉がいました。

「ママ、協ちゃんのお誕生日、お友だちよぶの?」

「協ちゃんはまだ幼稚園にはいったばかりだし、お友だちも、一人ではお客さまにこれないでしょう? お母さんたちが、連れてきたり、お迎えにきたり大変だから、今年はおうちの人のだけにしましょうね」

「ふうん、仕方ないね、和くんたちも来年になったらお客さまにこれると思うよ」

すると、この話をききつけた三年生の潤がとんできまし

た。

「可哀そうな協、まあいいよな。陽子姉ちゃんとぼくが盛大なパーティをしてやるからたのしみにしている」

それから毎日毎日、学校から帰ると遊びにもいかないで、二人でプレゼントをつくり、誕生会の計画をしました。

「ママ、姉ちゃんと兄ちゃんが、お部屋にはいつちゃ駄目って、ぼくのプレゼントつくってるのだって」

「お誕生日、まだ? いつくるの? いくつねたらくるの? ぼくたのしみだな」

入園以来、幼稚園で何回もお友だちの誕生会を経験し、誕生日の子どもには、先生が縫ってくださった、ワッペンを肩にとめてもらえて、みんながお祝のうたをうたってくれて、その日だけは三年保育の組も、幼稚園で、お母さんたちのつくった、おいしいケーキやごはんを食べられるので、何となく自分の番が待遠しいような気持ちの素地ができていたのでしょうか。二歳の時とはちがい、「ぼくの誕生日」をたのしんでたのしんで待ちました。

やがて当日、「協ちゃんの誕生会ご案内」のポスターが、父と母とおばあちゃんの部屋それぞれにはられました。兄姉が一週間がかりで計画し、練習したプログラムが食堂に

さげられて、誕生会がはじまりました。

- 一、司会 潤・会場係 陽子
 - 二、ハッピーバースデーのうた みんな
 - 三、ケーキのローソクに灯をつける パパ
 - 四、ローソクを消す 協
 - 五、ケーキを切る ママ
 - 六、ケーキを食べる みんな
 - 七、お皿を片づける 陽子
 - 八、落語 潤
 - 九、ピアノ 陽子
 - 十、プレゼント みんな
 - 十一、お礼のことは 協
 - 十二、協ちゃんのうた みんな
 - 十三、協ちゃんのプレゼントを片づける おばあちゃん
- 家族全員に役割がわりあててあって、苦笑させられますが、それでも、この日のためにきょうだいげんかも一時休戦とばかり、朝の登校時から、夜、床を並べてねむる時まで、一つの目標をめざして考え、活動した一週間、毎日がさぞはりあいのある日々であっただろうと思います。
- 一つ一つ包装紙でつつみ、リボンをかけたプレゼントが

陽子から十個、潤から六個、パパとおばあちゃんとお金を出しあって買った輪なげ、ママが苦心してつくったうさぎの枕と、かかえきれないほどのプレゼントをもらって協は「すごいねえ」「すごいねえ」の連発でした。

学校の家庭科でミシンや刺しゅうを習いはじめたばかりの姉が、長い時間をかけてつくった、通園手さげ、ブックカバー、筆入れ、クレパス袋、ナプキン、上ぐつ袋など……、工作のすきな兄が工夫した手紙入れ、ネンドの怪じゅう、紙ひこうき、風車、それに、昨年まで宝物にしていた怪じゅう的あてゲームなどをみていると、あれもこれもとお友だちをよべない弟に同情してつくった兄と姉のあたたかい思いやりが感じられて、「こんなにたくさんつくるひまがあったら、勉強すればよかったのに、宿題もそこそこに、こんなことばかりしていたのね」といいたい気持ちも引っこんでしまいました。

子どもの生きがいは、年がすすむに従って、自分自身のためをめぐらしてというだけでなく、他のもののためにも、それを求めることができるような気がします。そして、このことは、人間としての生き方にふかいかかわりあいをもつといえるのではないかと思います。

その日から、協の「プレゼントにいのちをかけて」といいたいような日々がはじまりました。家族全員の誕生日をたしかめ、父親の誕生日が一番間近だということを知ると、「パパの誕生日のプレゼントつくるからあき箱ちようだい」と毎日毎日、あき箱を重ねてセロテープではった戦車や、新聞紙にマジックで何ともわけのわからない絵をかいた壁かざりつくり「パパよろこぶよ、『すごいね、すごいね』ってとびあがるかもよ」と熱中しています。

「早く誕生日がこないと、ぼくの部屋は、ゴミ捨て場みたいになるぞ」とパパを冷や冷やさせていることにはおおかまいなく、朝目がさめると「今日は何日？ パパの誕生日まだ？」と聞き、「まだよ」というと安心してまた一ねむりする協をみていると、きつと誕生日の当日は、午前五時か六時の早朝の誕生会になることでしょう。

こう考えると、子どもの生きがいは、自分がかつて、全身で受けとめた喜びの体験の再現をねがう心のあらわれでもあるように思えます。このことから、子どもの生きがいは、突然、単独に生じるのではなく、人と人の、あるいは人と物とのかわりあいの中で芽生え、育っていくものであるということができません。

生きていくたのしみを求めて

夏休になったばかりのある日、「ママ、冬休みはいつからかねえ」という息子にあきれていいました。

「まだ夏休になったばかりじゃない」

「だってさ、学校がはじまると、毎日きまったお勉強があつて、同じ時間ごろ帰ってきておやつ食べて宿題して、ごはんたべて、テレビ見て、九時になったら、ママが明日おきられないからねさいって言って、それでおしまいでしょう。変身サイボーグセブンなんて、ぼくが考えたマンガかくひまなんかないんだもん。でもおやすみが長くあるとね、三日分ぐらい、夏休帳まとめてやるでしょう、そしてたらあとは、ぼくがきめた時間割で、一日中だってマンガもかけるし、理科の自由研究もできるし、夜ねる時だつて、すごく明日になるのがたのしみなんだから」

調子のいいことばかりいってと笑ってすごすわけにはいかない心のさげびを、とめどなくつづく夏休みへの期待のことばの中から、感じさせられます。知らず知らずのうちに、あるいは全く善意のつもりで、私たち周囲のおとなは、

子どもの生きがいの芽に気付かなかつたり、あるいはつみとってしまったりしているのではないでしょうか。

「ママ、宿題勉強じゃなくて、自由勉強していくとね、先生がシールをくれるんだよ。三十枚たまるとね、怪じゅうシールをくれるんだ。忘れものするとね、一枚とられるかもしれないって」

重大ニュースだといわんばかりに報告する息子に大して感動もせず、それどころか、教育者らしさというわるいくせが頭をもたげて、心の中では「シールのための勉強なんてなさない子」と思っていた私でした。

ところが、その日から、「ママ、ぼくね、自由勉強、カメの生活にしたよ。毎日カメについて調べるんだ。そして先生がね、カメの先祖についても調べてみなさいって、もし、時間があったらね。ぼくの苦手な書取を五つずつ書いてみたら、きっと覚えられるって。明日の時間割大丈夫かな。シールとられちゃ大変」と見がえるように意欲的になった潤をみて、つくづく反省させられたことでした。

これまで、何度いいきかせても、いつの間にか、土曜日には一週間分全部の本がランドセルにはいって、おまけに給食袋まで平気でぶらさげていくわが子に、これも性

格かとあきらめかけていた時であつただけに、シールによる動機づけの効果は目をみはるものがありました。

子どもの生きがいは時としては、適切な動機づけによつても生まれるものであることを知りました。

「陽子ちゃんは、生きていてよかったと思うのはどんな時？」

六年生の娘はしばらく考えていいました。

「あのね、今日もたのしかったなあ、明日もたのしいことがありそうだと、夜ねる前に神さまにお祈りする時に思える日。わたしね、夜、ねる時が大好き。だって明日にながつている今日でしょう。それに、ママや潤ちゃんやみんなと、大きくなつたらなんて床の中でよくお話するでしょう。そして目をつぶると、いろいろなことを考えるの、人間に生まれてよかったなつて思うこともあるのよ」

他のものと差別するという意味ではなく、心から人間に生まれてよかったと思える心、これも生きがいのもち方として最も大切なことであるように思います。

(西南女学院短大)

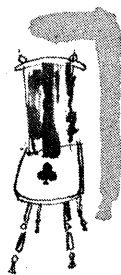
精神薄弱児の保育

仙台にきて、三年めをすごそうとしている。仙台にきた時、是非、始めたいと思っていることがあった。それは、精神障害とか情緒障害を持つ子どもたちの保育グループを作ることだった。そして、その希望を持ちつつも、いまだ実現していない。

希望の灯はまだ消えずに持っているつもりなので、いつか始めたいと、その思いを持ち続けている。しかし、こういうことは、考えたらすぐ走り、行動しないとイケないのかもしれない。

障害をもつ幼児の保育ということを考えるきっかけになったのは、東京のA研究所の家庭指導グループでお世話になったことに始まる。週二回、七、八名ぐらいの幼児グループを二名の先生が担当する。就学前の幼児は、何らかの精神的な障害があり、私もそこで一人の自閉的な子どもを受けもちながら、多くのことを、子どもたちや、先生方から学んだ。そこでは、自由な、明るい保育が、のびのびと展開されていて、今でも心に残っている。そこには、子どもたちと親と、保育する人たちとの

石割陽子



調和と信頼があったと思う。仙台に来る時、グループの責任者でいらっしやるT先生から、仙台で、やれることがたくさんあるという励ましの言葉をいただいたのに、私の方はいまだ、何ら形ができてこない。

ヨーロッパの施設・ベテル

昨年夏、ドイツでO M E Pの世界大会があったので、それに参加し、北ヨーロッパの保育を中心に見た。主として、精薄施設を見てまわったが、いろいろな思いが頭をめぐっていた。何か、考えたり、見て歩いたりばかりいて、日を過ごしてしまっただよように思える。幾つか見学した精薄施設の中で、印象に残っているのは、ドイツのベテルの町で見てきたこと、またフィンランドのヘルシンキ郊外の施設を訪ねたこと、そして、スエーデンでは、ストックホルム郊外の施設等だった。

ベテルの町は、精神障害をもった人たちと、もっていない人たちが、共に共同体を作り、生活を営んでいた。それは、いわ

ば精神障害者と健康な人たちとの生活の統合（インテグレーション）ともいえるかもしれない。ホテルの町には、世界の国々からボランティアが来て、人々の生活の介助をするが、医者とか、心理学者とかいった専門家の数は、必ずしも充分ではないと、かつてそこで働いていたドイツ人の学生が話してくれた。町の中の幼児グループの保育は見学できなかったが、養護学校の低学年のクラスを見学した。木製の、丸い、碁石ぐらいの大きさのものを使って、数の学習をくり返してやっていた。機能訓練の体育館もまだ新しく、屋内プールもあった。

スエーデン・デンマーク・フィンランド

スエーデンでは、二つの精薄施設を訪ねたが、その一つは、ストックホルム郊外から五、六十キロくらい南にあるもので、何よりもうらやましかったのは、緑と湖にかこまれた広い美しい土地があり、施設全体が明るいふん囲気一杯だったことである。保育内容そのものは、驚くものはなかったが、小人数制で、たっぷりしたスペースの中で、保育さんが世話をしていた。ある一室で、幼児に水遊びをさせていた。大きな水槽が室内にあり、水に手を入れたり、おもちゃの舟を浮かべて遊んでいた。普通児の保育所等でも、水遊びを保育に積極的にとり入れているようだった。この国立の比較的新しい施設は、人間的な暖かさが生活の中にあるように思われた。夕食はもちろんだが、

昼食時には、自分の寮に帰って、寮の保育さんと一緒にするしくみだった。この施設には、所長にあたる人が二名いて、その一名の人は女性で、非常に自由な考え方をもった人で、人間としての魅力が感じられた。彼女は、ロンドンのモンテッソリア国際学校でも学んできた人で、美術に関しても大変造詣の深い人であった。教材ではかなり苦労しているようで、普通クラスの小学校の教科書をたくさん用意していた。現在、いろいろ研究中ということだった。難聴児のためのオーディオルームは、立派な設備を持っていた。

もう一つの精薄施設は年齢の幅も大きく、また重度の子どもから通園している子ども等、さまざまであった。精薄者、精神病者の作業療法の施設はかなり大がかりなものだった。ここに通園している子どもの保育にあたっては先生に会って、室内をみせてもらったり、子どもについて話しあった。この先生は、精薄児の教育者として、スエーデンで名前の知られた人のようなだったが、彼女を通じて私が一番強く感じたのは、精薄の子どもたちの可能性を見つめる態度と、自分の情熱をかけ、子どもたちを愛しているということが、外からも感じられることだった。アメリカで精薄教育をやってきた経験もあるこの人は、この学校ができたとき、建物が、建築家の美的観点から建てられ、教師の実践的な経験からの希望がしりぞけられた時、猛然と反

対して、完成した建物の一部を改造してもらったというエピソードの持主でもあった。この人の意志の強さが感じられた。

他日、ストックホルム市内の普通児の保育所を訪問したが、子どもたちは一応、年齢でクラスわけされていたが、違うクラスへの移動が自由であった。その所長さんは、保育における“インテグレーション”（統合）と“インデペンデンス”（独立）を強調していた。デンマークのコペンハーゲンの幼稚園を訪れたときに、案内してくれた心理学者で、精薄児の保育に興味を持っている人から、普通児のインテグレーションを、どう考えているかと聞かれ、それでもインテグレーションという言葉を耳にした。彼は、そのことを真剣に考えているようすだった。精薄児の統合は、わが国でもかなり考えられ、行なわれている所もあるが、問題は、多々あるようだ。

フィンランドでは、ヘルシンキ郊外にある国立の精薄施設を見せてもらったが、やはり、美しい緑の多い、環境の良さに目をみはった。そこは、幼児から大人までの施設だった。スエーデンでも、イギリスでもそうだったが、大人のいる施設は、必ず、作業療法的な一室があり、そこで簡単な作業を行っていた。そこでは、電気のソケットの組合せ等をやっていた。幼児の遊戯室は地下にあって、クラシック音楽をバックグラウンド・ミュージックに流していた。音楽の選択をどうしているかと、

その心理学関係の人に聞いてみると、まだ充分検討していないことだった。幼児の遊戯室が地下にあるのは、採光とか、自然への接触、また、遊びの空間への広がりという点から考えると、私自身は、あまり感心しなかった。

イギリス

イギリスでは、ロンドンから少し離れた精神病院を訪れたが、遊戯室に、精神病の大人と精薄幼児が一緒にいて、室内のふん囲気が、他の施設と少し異なっていた。この点について、案内してくれたその女医さんにたずねると、大人が子どももの面側をみる場合もでてくる点といった。また、精神病患者と精薄者と一緒に生活させている点には、両者をはっきりわけることがむずかしいという意味のことを述べていたが、私は少し、疑問を感じた。この病院の医師たちによって考案された、厚いスポンジの遊具を見せてくれたが、幼児のいすにしたりもできるような形もあり、身体的に不自由な子どものために有効であるようにみられた。この病院は、運動機能の訓練ということにはかなり力を入れていたが、治療保育そのものは、あまり行なわれていない感じだった。

ほかに、ロンドン市内の、アドバンチャー・プレイグラウンドを四、五カ所見学したが、その中の一つは、心身障害児のためにアレン夫人が中心となってやっているもので、各養護学校や

施設から、子どもたちが毎週一、二回、バスにのってやってきて、広いスペースの中で、多少、ハラハラするくらい、思いきり、そのエネルギーを発散させていた。たとえば、人工池で子どもが水にぬれながら、いかだをこいだり、木と木の間にロープをはって、そこに滑車で動く箱をつるし、それにのって遊んだり、高い所から飛びおりて遊べるように、下にたくさんスポンジの層のようなものが積んであったり……。また、非常に大きなタイヤを、何本もの太いロープでぶらさげて、タイヤの上のったり、ロープにぶら下がったりしながら、子どもは、非常に楽しげに遊んでいた。この遊園地はフィルムに収められ、ドイツの会議で紹介されたが、かなり各国の関心を集めていたようだった。

以上は、私がおもに北欧やイギリスで見えてきた精薄児の保育であるが、私が見てきた限りでは、その国の福祉に対する考え方や、国の力の入れ方が反映していると思った。一般に、かなり自然環境のよい所に、広いスペースをとって施設が作られていたが、保育内容そのものでは、驚くほですすんでいるという感じはしなかった。ドイツのベテルを除いては、一般社会との生活の統合というより、むしろ町から離れた場所で、障害のある人たちだけを生活させ、保護し、指導しているという印象だった。一般社会と施設の統合の問題は、かなりむずかしいと思

うが、私たちの障害者に対する認識や理解が深まった時点では、部分的な統合は不可能ではないと思う。

日本での体験

外国のことを述べたが、私は、今年の五月から八月の夏休みにかけて、秋田県の横手市郊外にある重度精薄児の施設に通った。横手は、冬、かまぐらの町として記憶にある方もいるかもしれないが、従来の精薄施設に、重度児の施設が併設され、二十名の子どもに対して、五名の保母がその仕事にあたることになった。真新しい建物は明るかったが、遊戯室には、おもちゃの自動車や、三輪車以外、遊具はまだ入っていないかった。五月、六月と施設を訪れるたびに、子ども数が増して、七月にはほぼ定員に達したようだった。しかし、病気のため、数人入院していて、八月になって私はずっと一緒に遊んだ子どもたちは十五名だった。年齢は六歳から十三歳までで、男児が多く、身体の大きい子と小さい子との差が目立った。「遊び」というテーマを持っていた私は、この子どもたちと何をして遊ぼうかと考えつつも、私自身、子ども集団の中に入って、彼らと近づきになることが最初のステップだった。

八月の研究に入る前に、六、七回ほど子どもと一緒に過ごすことができた。最初子どもたちの中に入ってその行動を見ていると、模様のついたボールをころがしたり投げたり、また、私が

まりつきをしてみせるのに、興味を示す子が二、三名、活発に三輪車に乗れる子が、男児三名ぐらいで、ほとんど、どんな刺激にも、反応しない子が、二名ほどだった。また、言葉や、動作などから、自閉的傾向の強い子が二名ほどいたが、Nちゃんは、保母さんや、室内の大人に抱っこされることを、非常に強く、要求してきた。偏食の問題で、かなり保母さんが苦勞している子の一人でもあった。

二十名近い子どもたちは、遊戯室の中で、バラバラに動いていたが、新しい環境に慣れるにつれて、全体としての落着きとどうか、各々、好きな場所等もできてきた。遊戯室の人口密度が高すぎる感じがしたことも否定できない。室内のテレビに特に興味を持っている子が、何人かいるのがわかった。画面をじっと見ている子もいれば、チャンネルを回したり、消したりが専門の子、それをいつも止めようとする子、テレビについても、いつの間にかそれぞれ役割らしいものが、できていった。輪などは、輪を棒に投げ入れるより、むしろ、子どもの腕などに投げ入れて遊んだりする方に、喜びの表情をあらわした。

S子ちゃんは、最初は床のじゅうたんの毛をむしっていたが、やがて、おもちゃの自動車をさかさまにして、車輪を手でまわしていた。この動作はずっと続いている。S子ちゃんに本を渡すと、いつの間にか細かくやぶき始める。やぶいた紙片を、お

もちゃの汽車の煙突から、投げ入れて、つめこんで遊んでいた。Y子ちゃんは、気分がのると、自分の手足を動かす動作を他人に真似することを要求し、その通りにしてやると喜んだ。Y子ちゃんと遊んでいる時、彼女の動作を模倣しながら続いている、次には、私の方が違う動作を示しても、かまわず、彼女は自分のやりたい動作を二、三続ける。しかし、私が彼女の模倣をしないで、一定の動作をじっとやっていると、彼女は動作をやめて、相手を見る。偶然、二、三の新しい動作をしても、なかなか相手の動作を模倣するというところまでいかない。

遊戯室の集団の中で、私は時々一人の子と遊びながら、相手の行動を観察する。この子にとって、好きなこと、できることは何なのか見つけようとした。盲児のFちゃんは、機嫌がよいと相手の言葉を模倣する。一つの言葉をいい続けて、他の言葉をおかない時、逆に、こつちがFちゃんの言葉を模倣し続け、その連続の中で違う言葉を発すると、ひょいと相手の言葉をつたりした。たとえば、Fちゃんが「もしもし」とくり返している。私が「おやっ」といっても模倣しない。そこで、私も「もしもし」とFちゃんの言葉のあとでくり返す。そして、今度は私が「もしもし」と反応する代り「おやっ」という刺激音を返すと、Fちゃんも「おやっ」という。そんな言葉のやりとりは、Fちゃんには楽しそうだった。

二十名の子どもの中で、会話ができる子はHちゃんだけで、

Fちゃんは、もしもし、おやっ、ボール等の単語をいうが、反響音が主である。ただ、「いやっ」とか「やだ」とかいう否定語は拒否の態度と共に使っているようで、意味が生きているのかもしれない。目が見えないFちゃんが「ボール、ボール」とさげんでいると、言葉を理解しているHちゃんが、室内のボールを探して、Fちゃんに渡してやる。するとFちゃんは、部屋のすみにすわったまま移動し、両手、両足を同時に使って、ボール遊びを一人でやる。Fちゃんの「ボール」という言葉は、対象物をとらえているのだろうか？ 入所して四カ月ほどたったとき、Hちゃんの語い数は、驚くほど増えていた。持っていた言葉を、表現しないでいた感じである。彼についての記録にも、言葉はほんのわずかしかしやべらないと記されていた。

たとえば、八月のある日、Hちゃんに「今朝、何やったの？」と聞くと「けんおん」と答えたので、驚いて、保育さんにたずねると、その日は、午前中、子どもたちの検温日だった。Hちゃんは他の子どもたちの名前をどんどん覚えていった。別室でこのHちゃんとMちゃんに玉さし盤をやらせた。Mちゃんは、競争心と思われるものをHちゃんに示した。Mちゃんは、言葉のある程度理解するが、自分では、ウーとかアーしかいえない。しかし、電車ごっこをしたり、ボール遊びをする時、Hちゃん

と共に他児と遊ぶことができる子である。

一方、遊びにも何にもつてこない子どもとつきあって、私は、再び、遊びの意味とは一体何かというふり出しにもどった。現実問題として、排せつ訓練、食事、衣類の着脱という身辺の自立のことがでてくる。おむつをしている子が多い。おむつ交換を、子どもたちが全部、いつも喜んでるようでもない。保育士さんが話してくれた。しかし、おやつとか、食事をつけるとき、ドアーに、ほとんどの子が集まってくる。排せつと食事に関しては家庭のしつけの問題を考えさせられた。一名を除く全員が家庭から初めて、施設に入所しているので、家庭の養育環境をそのまま、持ってきている。年齢の高い子ほど、その習慣形成は強化され、新しい学習にかなり困難を示しているように思われた。

精神障害の重い子であれ、軽い子であれ、幼児期の教育、保育が重要ではないかと思う。恵まれた保育の場や、心豊かな保育者が、能力的に制限された子どもたちの可能性と幸せを増大する大きな力となってくれるのではないか。もちろん、いい施設、いい保育者が存在するだけで、精神障害児の根本的な問題が解決されるとは思わない。子どもをとりまくコミュニティや社会が、どう受けとめていくかが、非常に大事なことである。

(尚綱女学院短大)

子どもと民話

おばあちゃんのはなし

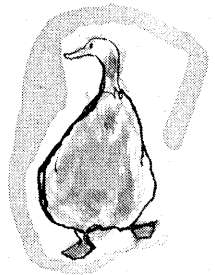
山形県の農村で、いろりのまわりにこしをおろし、おばあちゃんからきいた「むかし」、また、群馬県の山村で、暗い電球の下で、こたつに入りながらきいた、おばあちゃんの「むかしあつたげな」の話、方言が入って、その一つ一つのことばはわからなくとも、「ヘエ」とか「フン」とか、その地方でつかわれていたあいのでを入れて話を聞くと、語っているおばあちゃんの話のリズムがでてきて、楽しい音楽になって、私の耳に入ってくるのです。そして、とても心が安まるのです。

なぜでしょう。

都会で、毎日公害のきかない空気をすったり、交通戦争のまんなかにいるからではないと思うのです。

語りてのおばあちゃんと聞きての私たちが語りとあいのので一つになって、人間と人間がふれあつてできる、語りの芸術の

中村博



中にとけこんでいるからだと思うのです。

おばあちゃんの語りは新劇の俳優さんのようにうまく語ってはくれませんが、だが、その土地にながく住みつき生活してきた者のみができる生活の中から語らなくてはいられないものがあるように思うのです。だからこそ、私の心をうち、心をやすめてくれるのです。

文字も文章もうまくかけないおばあちゃんが、それこそ、先祖から何百年も継承されてきた話、それはその土地に生きている生物と同じ、いや、人間の歴史そのもののような重さを感じさせるのです。

わらべうた

あるところで、わらべうたを研究している人たちが集つてるところがありました。二人がむきあつて、ほおをゆびさして、おでこをさわつて、わらべうたをうたいながら遊んでいるので

かけまわるとき「ささら」（竹の先を細かくさいたもの）を持って、自分のまわりをたたきながらへびもまむしもどっけどけ、おいらは喜多見のやえもんだ。やりも刀も持つてるぞ」と声をそろえてかけずり回ったもんだ」

と語をしてくれました。やえもんという人の伝説があるのですが、この地域にはへび、まむしの類がたくさんいたのでしょう。そこには、やえもん伝説を生かした、人間の生活の知恵があるように思うのです。

やえもん伝説とは、むかしこの地のとの様子が狩りにでたとき、家来のやえもんが、えものを探しているとへびとししがあらそっているのであひ、ししを槍でつき、へびをにがしてやっただけです。その後へびはやえもんに恩をかえしたというのです。

以上のようなことから、「むかし」も「わらべうた」もそして伝説も、私はみんな民話というジャンルの中に入れて考えることにしたのです。そして、民話が語り伝えられているだけでなく、それは、その地方の生きた歴史であり、人間の生活そのものであると考えるのです。

したがって、日本人という人間をつくるのに、大変重要なものだったのではないかと考えるのです。

民話ブーム

近ごろ、よく聞くことばで「民話ブーム」といわれていますが、本当にそうでしょうか。たしかに本屋さんに行くとき、「〇〇の民話」とか絵本がたくさんならんでいます。学級の子どもも、松谷みよ子さんや大川悦生さんのむかしばなしの本をたくさん読んでいます。母親の集りに行って、読書会に行っても、上記のような作家の人たちの本が読まれています。そして「民話って、おもしろいですね」とか「民話を研究しているのです」という声をききます。また、ある学校では、国語教科書にでている「一寸法師」や「かさじぞう」の文と、原話と称して、ある作家のかいた「一寸法師」や「かさじぞう」と文章をくらべて「どんぶらこっこ すっこっこ」の方がいいとかという批判をし、それが民話の研究のようにいい、発表することによって、民話ブームということばをマスコミにのせているのではないかと考えられるふしはありません。

私は作家の方々が書かれた、民話文学を否定するものではありません。作家の方々も、地方へでかけ、いろいろのまわりではなしを聞かれていることを知っています。そして、その語りでの生活をからだで感じ、からだでうけとめて作品として書かれていることも知っています。そして、その人たちの民話文学が民話ブームをよんでいることも事実でしょう。だからと言って、私はブームということばはあまり好きではないのです。

それよりも民話や、民話を語りつぐ姿や、民話で何を語ろうとしているのかというようなことを、本当のいみで定着させることだと考えるのです。

民話の心

むかしばなしに「たにしときつね」という話があります。うさぎとかめのような話ですが、たにしときつねが競走をします。スタートでたにしはきつねのしっぽにしがみつき、ゴールの近くできつねがうしろをふりかえったとたんにしっぽから離れてたにしが勝ったという話なのです。

この話でたにしがずるいと言えるでしょうか。小さい者が生きていくためのたくましい知恵だと思ふのです。自分の子どもが小さければ、知恵を働かせて生きていくのだよという願いをこめて語るでしょう。民話には、そういう民話の心のようなものがあるのです。

これは本当にあったことですが、富士男君というとても小さな子が学年で一番大きな昇君と相撲をとったとき、しきりに入って、にらみあったとき、急に目じりを両手でさげたのです。もちろん昇君は笑いだしました。そのときすかさず押しだしました。四十八手にはない「笑いだし」という手になるでしょう。このことは、「たにしときつね」の現代版と言えないでしょう。

か。

教師や母親が、民話文学でも、民話でも、そういういみで、深く民話をとらえて、子どもたちに語ってやれば、それは生活の中に生きていくと思ふのです。

おわりに

さいごに、都会でも農山村でもそうなのですが、最近テレビがどの家庭にも入り込み、家の中の対話がなくなってきたと言われています。

先日も福島県の農村に行ったとき、テレビがあるので子守りもみんなテレビのマンガにまかしてしまったので話を忘れてしまったよという、八十七歳のおばあちゃんにいました。私たちがほかけて行ったので十数年ぶりにおもいだして「むかし」を語ってくれたのですが、その家の中学生の孫が、はじめて聞く自分の家のおばあちゃんの話を感じてきていました。

いまからレパートリーをたくさんもつことは無理かもしれませんが、一つでも二つでも、これならできるという話を身につけて、子どもたちに語ってあげましょう。それは日本の文化財を発展させる未来の主人公のためになるのです。

(世田谷区立三宿小学校)

「幼児教育の源流」Ⅱ

ルソーの幼児教育思想(下)

宮 本 光 雄

(四) ルソーの家庭教育論

新生児の誕生とともに始められる教育について、ルソーは家庭教育を重視すると共に、その中核をなす両親の役割を強調する。しかし、やむをえない場合、乳母や家庭教師に委託することはこの限りではないとルソーはする。この場合、心身ともに健全な乳母や家庭教師の選び方やそれらの役割などについて彼は詳細に論述している。ここにも、ルソーの教育環境の重視をうかがうことができる。すなわち、生まれてくる子供をとりまく自然的環境条件の重視と共に、人的環境条件の重視でもある。

母親の役割 両親のうちでも、特に子供の初期の教育に対する母親の義務は最も神聖なものであるとし、母親による哺育の重要性をルソーは次のように力説している。「最初の教育は最も重要なものである。そしてこの最初の教育は異論の余地なく女

性の仕事である。もしも自然の創造主がこれを男性の仕事にしようとしたならば、子供を養う乳を男性に与えたはずである」

(参考文献①の10ページ、参考文献②の13ページ、以下すべて①―10、②―13と記す)と。それゆえ、「人生の最初の師は、私たちに乳を与えて育ててくれる人なのである」(①―21、②―19)このことは、教育を意味するフランス語の、エデュカシオン(education)が古代には「授乳」(①―21、②―19)という意味をもっていたことからわかる。ルソーは述べている。つまり、自分の子供を自分の乳で養育することは、母親が人類に対して負う第一の義務であるというのである。

このことを彼が力説するゆえんは、当時フランスの上流社会では、出産しても乳児を自ら養育せず、乳母にまかせる風潮が一般的であったことよってである。そのことから派生する非教育性に対して彼は批判したのである。

そして、乳児の教育について重要なことは、不自然なまでこ

れを束縛しないで、自然のままに四肢やあらゆる器官を自由に働かせることである。このためには、自然の愛のきずなで結ばれている母親自らがその養育にあたる必要があるとルソーはいうのである。

さらに、ルソーは「母が母でなければ、子も子ではない。母子間の義務は、相互的なものである。だから、一方がその義務を果たさなければ、他方もこれを怠ることになる」(①―33、②―25)と述べている。したがって、母がまず母として子供に対する義務を充分果たせば、やがて子供は母に対する義務を自覚すると同時に、母子共に自然の愛情によって結合されたことになる。この母子間の自然な義務と愛情とは、人間としての生活の第一歩であり、この中に将来におけるすべての美德と人情の萌芽が宿っているのである。

また、ルソーは声を大にして次のようにいうのである。

「人々を第一の義務に立ちかえらせたいと思うならば、まず母親たちから始めるがいい。そうすれば、それから起きる大きな変化にあなた方は驚くだろう。万事がこの最初の墮落から連鎖的に起こっている。一切の道德的秩序が失われる。万人の心から自然の感情が消滅する。家庭の内部に生氣がなくなる。新家庭の感動的な情景もはや夫たちの心を動かすことはなく、他人にはなおさら関心のないものとなる」(①―31、②―24)と。

このように、母親の義務の及ぼす影響はきわめて大きい。母が母として子供に対する義務を果たすことが、人間一切の美德の根源である。したがって家庭における母親の役割は、家庭を通じて人間教育全般に対する根源的なものといえる。

ルソーによれば、母親が子供を真の愛情をもって自らの手で養育すれば、風俗さえもおのずからあらたまり、自然の感情がすべての人の心に目覚めてくるというのである。こうして、彼は家庭生活の意義を強調して次のようにいっている。

「一家団らんの魅力こそ腐敗した風俗の最良の解毒剤である。わずらわしいと思われている子どもたちの面倒も楽しみなものとなってくる。また、それが父親と母親を、互いに無くてはならぬものとしてくれる。夫婦のきずなを一段と強固なものにしてくれる。家庭が生氣にあふれてくると、家庭の世話は妻にとって何よりも大事な関心事となり、夫にとっても何よりも愉快な楽しみとなる。このように、ただ一つの欠陥があらためられるだけで、その結果は、やがて全般にわたる改革となり、自然はその一切の権利をとりもどすのである。ひとたび女性たちが母親に立ちかえったならば、やがて男性たちも父親に、夫に立ちかえるのである」(①―31―32、②―24―25)と。

父親の役割 ルソーは、家庭における母親の役割の重大さを強調すると共に、父親の役割の重大さについても忘れてはなら

ないとし、次のように述べている。

「眞の授乳者が母親であると同様、眞の教師は父親なのである。父母は、彼らの仕事の順序においても、また彼らの流儀においても完全に一致していなければならない。子供は母親の手から、父親の手に渡るようにしなければならない。子供は、世界でいちばん有能な教師によってよりも、知識や技術に劣っていても思慮分別のある父親によってこそ、よりよく教育されるものである。なぜなら、才能の不足を補うからである」①―38、②―27―28」と。すなわち、眞の授乳者が母親であり、眞の教師は父親であり、両者が完全に協力一致してこそ、眞の子供の教育はなされるのだとルソーはいうのである。

しかしながら、世の父親たちは、多忙であるという口実で、父親としての義務である子供の教育をなおざりにするのが常である。このような父親たちに、ルソーは次のようにいうのである。

「父親は、子供をつくって、これを養つても、それだけでは彼のつとめの三分の一しか果たしているにすぎない。父親は、人類に対しては人間をつくる義務を、社会に対しては社会人をつくる義務を、国家に対しては市民をつくる義務を負っている。

この三重の負債を支払うことができるにもかかわらず、なおそれをしない者はすべて罪人であり、しかも中途半端な支払い方

をするときは、恐らく一層悪質な罪人というべきである。父親としての義務を果たすことのできない者は、父親になる権利などはまるでない。貧困であろうと、仕事であろうと、体面であろうと、わが手でわが子を養い育てないですむ言訳には絶対にならない」①―39―40、②―28」と。

母親が子供の眞の愛情ある授乳者になり、父親が子供の思慮深い眞の教師となつて、両者が完全に協力して、直接にしかも自然の道にしたがつて、自由にそしてきびしく、その役割をまっとうすれば、子供は眞の教育を享受することができるであろうというのが、ルソーの考えである。そこで、自然のきずなで結ばれた父と母と子とが自然の結合を回復しうる人間教育の母胎は、家庭にあるとして、彼は次のようにいうのである。「一家団らん情景にまさるうるわしい絵画はない」①―39、②―28」と。

このように、家庭教育の重要性を主張したルソーは、自然の道にのつとつた眞の家庭教育によつて、自律的主体としての幸福な「眞の自然人」の形成を目指したのである。

(五) ルソーの身体教育論

前述したように、子供の心身の発達に即して教育しようとするルソーは、乳幼児期を主として家庭教育と身体の養護鍛練の

時期として位置づけている。そしてルソーがいかに身体教育を重視しているかは、彼の「身体は精神の命に従うためには強壯でなければならぬ」(①―51、②―34)とか「虚弱な身体は精神をも弱くする」(①―51、②―34)とかいう言葉からもうかがうことができる。ここに、彼は、健全な精神に対する健全な身体を必要を力説すると共に、身体の健康が精神活動の基礎であり出発点であるとするのである。

養護 乳幼児期における身体発達として最初にあげねばならないことは栄養との関係である。もちろん、乳幼児期に限らず発育・発達と栄養が密接に関係していることは周知の事柄であるが、乳幼児期では特にその関係が深いといわれている。ルソーもこの栄養問題について、母乳の質とか動物性食物と植物性食物との比較とか食物と乳質との関係など、さらに、調理法の改善にまで言及している。

また「空気が子供たちの発育に影響を及ぼすのは、人生の最初の数年間において特に著しい」(①―64、②―40)として、ルソーは、特に乳幼児には田園の新鮮な空気と静寂な環境が最も必要であるといっている。

これらのことから、ルソーがよい環境を整えた上で、子供のびのびと自然にまた自由に生活させ、身体の発達をうながそうとしたかがうかがえる。

子供の健康を増進させようとするルソーは、分娩直後の産湯の問題から沐浴の必要を説き

「私はこれを、その時だけの清潔や健康の面からのみ考えるのではなく、同時に筋肉組織をより柔軟にし、それによって寒暑のあらゆる段階に苦痛もなく危険もなく順応させるのに有効な養生法として考えているのである」(①―66、②―41)と述べ、

さらに子供の頭きんや帯や産衣についてふれ、子供の身体を束縛するようなものをはき、「手足を自由に動かせるような広くゆったりしたもの」(①―67、②―42)でなければならぬし、「子供の運動を妨げるほど重くても、また外気の刺激を感じさせないほど厚くてもいけない」(①―67、②―42)とし、「子供の手足を動きのとれない状態にし、束縛しておくことは、血液と体液の循環を悪くし、子供が強く大きくなるのを妨げ、体格を悪くする以外、何の役にも立ちほしくない」(①―25、②―21)と述べている。さらにまた、ルソーは「子供の身体がしっかりと自由ののびのびと広げさせるがよい。小さな手足を日々に丈夫になつていくのがあなた方の眼に見えるだろう」(①―67、②―42)と述べている。

このように心身の発達や年齢に応じて子供を充分発育させようとするルソーは、栄養上の注意や環境の整備はもちろん、子

供の生活全体にわたってこまかく配慮した上で、子供の生命の奥底から自然に盛り上がってくる力をのびのびとはぐくもうとするのである。それゆえ、ルソーの消極教育は、何もしない教育を意味するのではなく、また外から子供に強制する注入主義的な教育でもなく、よき環境を整えるなどの教育的配慮をし、子供の心身の発達を養護した上で、子供の自由と自発活動を大切にすることをいえる。

鍛錬 子供の生命の奥底から盛り上がってくる力を待って子供の身体をはぐくもうとするルソーは、次のようにいうのである。

「人は子供を保護することしか考えないが、それでは充分でない。人間としてわが身を守り、運命の打撃に耐え、貧富も意に介せず、必要とあればアイスランドの水の中であろうとマルタ島の焼けただれる岩壁の上であろうと、生き抜くことを彼に学ばせなければならぬ」①―22―23、②―20」と。

ここに、ルソーは、いかなる境遇にあろうとも、それらに耐え、やがてそれらを克服しのり越えていく強い意志力や体力をもった人間の育成を考えているのである。

そのために、子供の身体を鍛えることから始めなければならぬとするルソーは、次のようにいうのである。

「自然を観察しなさい。そして自然の示してくれる道に従い

なさい。自然は絶えず子供たちを訓練している。あらゆる訓練によって自然は子供の体質を鍛える。自然は子供たちに早くから苦しみや痛みがどんなものであるかを教えてくれる……。これが自然の掟である。あなた方はなぜそれに逆らおうとするのか。あなた方は自然の掟を矯正しようとして、自然の仕事をおちこわし、自然の配慮の効果をはばんでいるのがわからないのか……。大事に育てられた子供たちの方が、そうでない子供たちよりもずっと死亡率が高いことを経験が教えている。

子供たちの体力の限界を越えさせなければ、体力を使わせた方が、使わせないよりも危険が少ない。だから、いざれ耐えなければならぬ打撃に対して体力を鍛えておきなさい。季節や気候、環境の不順な変化、飢え、かわき、疲労などに対して子供の身体を慣らしなさい」①―34―35、②―25―26」と。

これは、ルソーの自然的鍛錬主義の徹底した一面を示すものである。ここでの鍛錬は、強制的な抑圧的な鍛錬や単なる形式的訓練ではなくて、自然の自由なふん囲気の中で、子供の個性や興味や要求を生かしつつ自然が子供に課す自然的鍛錬ともいふべきものである。したがって、子供を強制したり処罰したりする教育ではなく、また反対に甘やかしたり過保護にしたりする教育でもないということである。

ここにおいて、ルソーは次のようにいうのである。

「自然は身体を強くし身体を成長させるためにいろいろな手段をもちいるが、それに逆らうようなことは決してすべきではない。子供が外へ行きたがっているときに家にいるように強制してはならないし、また彼がじっとしていたがっているときに出て行かせるように強制してもいけない。子供の意志が私たちの過誤のためにそこなわれない限りは、子供たちとて無益なことを望むものではない。子供には思うままに飛んだり、駆けまわったり、大声をあげたりさせるべきである。彼らのあらゆる運動は自ら強くなるうとする身体の構造の必要から生じているのである。しかし、子供が自分ではできないで、他の人々が代りにしてやらなければならないようなことを望んでいる場合には、警戒しなければならぬ。その場合には、真の欲求すなわち自然の欲求と、生まれ始めている気まぐれの欲求、あるいはすでに述べたような生命の過剰から生じるにすぎない欲求とを注意深く区別する必要がある」(①—125、②—72)と。

このように、ルソーの身体教育は、決して人が上からまた外から強制したり教えたりするのではなく、子供の自由にまかせることであり、子供自らに実行させることである。そこで、私たちは、子供のうちにある一切の力の芽ばえを子供自身でのびのびと伸ばすことができるような教育的な環境を整えることはもちろん、今子供が真に何を求めているかを絶えず注意深く観

察することが重要である。そして、私たちは、子供の将来の人間形成に必要な基礎と源泉とをあせらずに着実に、しかも忍耐強く準備すべきであるとルソーはいうのである。

身体活動による知育 子供の頭脳が自然の睡眠から目覚めはじめ、子供が自ら見、自ら感じ、自ら考え、自ら実行するにつれて、子供は自分でいろいろな力を身につけるものであるとするルソーは、次のようにいっている。

「私の生徒、というより自然の生徒の場合は、できる限り自分のことは自分でするように早くから訓練されているので、絶えず他人に頼るようなくせは全くついていないし、まして、自分の物知りぶりを人にひけらかすようなくせはない。そのかわり、なんでも自分に直接関係することなら、彼は判断し、予見し、推理する。彼は、おしゃべりはしなすが実行する。世間で行なわれているようなことは一語も知らないが、自分にふさわしいことを実行することは実によくわきまえている。絶えず動きまわっている、かならず多くの事物を観察し、多くの結果を知ることになる。早くから豊かな経験が身につく。教訓は自然から学び取り、人間からではない。教えてやろうとする者などどこにも見当たらないので、それだけ一層自分で学びとる。こうして、身体と精神が同時に鍛えられる。いつも自分の考えで行動し、他人の考えで行動するのではないから、彼は絶えず

この身体と精神の二つの動きを一つに結びつけている。強くたくましくなればなるほど、彼は思慮分別のある正確な判断を下せる者となる。それは、両立しないと一般に考えられているもの、しかもたいていの偉人たちが兼ね備えているもの、すなわち、身体之力と魂之力、賢者の理性と闘技者の活力を将来もつための方法なのである」(①―208―209、②―114―115)と。

ルソーは、子供が子供の自由な活動の中で、直接関係する事柄については立派に判断し、予見し、推理するというのである。それゆえ、子供独自の判断力・推理力に適した形で知育を行なうためには、まず子供たちを自由にのびのびと動きまわらせ、身体活動を盛んにすることである。すなわち、子供の自由な自発的な身体活動を通して知育を行なおうとルソーはするのである。そして、身体活動によって、身体と精神が同時に形成されるとルソーはいう。ここに、ルソーは新しい知育論を提出したといえるのである。

(六) ルソーの感覚教育論

感覚教育の意義と概要 身体教育と共に感覚教育が幼児期教育の中心問題であるとするルソーは、次のようにいつている。

「子供は大人の体力も理性もない。しかし、大人と同じように、あるいはほとんど同じように見たり聞いたりする。子供は

大人ほど繊細でないにしても、同じくらいにはつきりした味覚をもち、また、大人と同じ感度によってではないにしても、同じようにはつきりにおいをかぎわけける。私たちのうちに最初に形成され、完成される能力は感覚である。それゆえ、この感覚を最初に育て上げなければならない」(①―240―241、②―130)と。

このようにして、感覚教育が幼児期教育の主要な部分を占めるのは、感覚が人間の諸能力のうちで最初に発達し、最初に完成するものであるという根拠によつてである。さらに、ルソーは、幼児期が感覚教育にとつて、最も適切な時期であり、最も成果を期待できる時期であるとして次のように述べている。

「器官がまだ繊細、柔軟で、それが働きかけるべき物体に適合させることができるとき、感覚がまだ純粹で迷妄からまぬがれているとき、そのときこそ、その器官や感覚をそれらの固有の機能がはたせるように訓練する好機なのである。事物と私たちとの間の感覚的な関係を知るところを学ぶのもこのときなのである」(①―223、②―122)と。

ここで注意すべきことは、感覚教育が、決して幼児期教育の独占物ではなく、人間の一生を通じて可能なことであり、重要なものであるということである。しかし、幼児期においては、実際の対象的活動がきわめて盛んであり、それがこの期の知的発達の全過程にとつて、まさに決定的意義をもつものであり、

きわめて複雑多彩な専門性を帯びた諸活動が急速に発達して、
るため、特に感覚教育の持つ役割は、その後の発達期に比して、
問題にならないくらい重要かつ決定的なものと言わざるを得な
い。(⑥―233)

ルソーは「感覚を訓練することは、単にそれを用いればたり
るといふものではない。感覚を通して正しく判断することを学
ぶことである」(①―241、②―130―131)と述べている。このこと
は、ルソーが単なる個別的な感覚の訓練を目指しているのでは
なく、将来の知的発達への基礎形成を旨ざしているといえる。
それは、彼の次の言葉からより明確にうかがうことができる。

「人間の悟性にはいつてくるすべてのものは必ず感覚を通して
くるのであるから、人間の最初の理性は感覚的理性である。そ
して、これが知的理性の基礎として働くのである」(①―223、②
―122)

ここに、ロックやコンディヤックの認識論や感覚論の影響を
読みとることができる。ルソーのいう「感覚的理性」と「知的
理性」とは、子供から大人への精神の発達段階を区分する主要
な原理となっている。この原理が、精神の発達段階に應ずる教
育を主張するルソーの裏づけとなっている。ここに、ルソーが
感覚教育を、知的発達と不可分な関係において位置づけている
ことは明白である。

さらに、ルソーは主知主義的な教育を批判すると同時に、感
覚教育の重要性を次のように主張している。「私たちの最初の哲
学の先生は、私たちの足であり、手であり、目である。そうい
うものかわりに書物を用いれば、私たちは推論することを学
ぶことにはならない。それでは他人の理性を利用することを学
ぶことになる。大いに信ずることを学ぶのであって、何一つと
して自分で知ることを学ぶことにはならない」(①―223、②―122)
と。

ここに、感覚教育は、主体的に行動し思考する人間を形成す
る上で、きわめて本質的な意義をもつのである。それゆえ、子
供に教え込もうとするのではなく、子供の自由で自発的な遊び
や身体活動を通じて、つまり、環境と子供の自己表現や自己活
動との感覚的な相互作用によって、主体的に行動し思考する人
間を形成する上での基本的なものを感性的かつ認識的に身につ
けさせようとするのである。そして、私たちは、前述した如く、
ただ何もしないで子供を放任しておくのではなく、子供の
の欲求や個性的特性などをよく観察し研究して、子供の生命の
奥底から盛り上がってくる力を充分に伸ばせるような子供の環
境を積極的に整備する必要がある。ルソーの消極教育は、この
ように、子供に対して私たちが教え込んだり強制したりしない
という点では消極的であるが、私たちが子供の欲求や個性的特

性などを把握して適切な子供の環境を積極的に整えなければならぬという点では積極的である。

ここに至って、ルソーは次のようにいつている。

「各々の感覚をできるだけ活用せよ。それから、一つの感覚の印象を他の感覚によって吟味せよ。大きさを計ったり、数をかぞえたり、重さを計ったり、比較したりせよ。抵抗力を測定したのちにはじめて力を用いよ。必ず、手段を用いる前に結果の予測をするようにせよ。子供には、努力を不充分にも余分にもしないことに心を用いさせよ。もし、このように、あらゆる運動の結果を予見し、また経験によって誤りを正す習慣を子供につけてやれば、子供は活動すればするほどますます正確に判断するようになってくることは明白ではないか」(①—241—242、②—131)と。

ルソーは、感覚教育を単なる個別的な感覚訓練としてとどめず、将来の知的発達にとって基礎となる推理力や判断力をつちかわせる方向で位置づけている。そして、ルソーは、子供の自由な自己活動における感覚的経験によって、子供の認識発達を正しく方向づけようとしている。ルソーの感覚教育の真意は、子供の自由な自己活動を通じて、主体的な人間を形成する上での基本的なものを感性的かつ認識的に身につけさせることにあり、それによって、子供の全生活活動を豊かならしめ、将来へ

の発達の基礎をつちかわせることにある。

以上のような観点に立って、ルソーは触覚・視覚・聴覚・味覚・嗅覚の教育について論述している。以下、それぞれを要約的に取り上げてみたい。

触覚教育 ルソーによれば、触覚は、私たちの身体の全表面にひろがっていて、身体を傷つけるおそれのあるあらゆるものを私たちに警告する不断の見張り役のようなものである。その絶え間のない働きのおかげで私たちはいち早く経験を獲得する。したがって、触覚の訓練なり教育を特にする必要がないように思う。それにしても、盲人は私たちより一層確実で鋭敏な触覚をもっていることが観察される。彼らは視覚に頼ることがないために、私たちが視覚で行なうことを彼らは触覚で行なわねばならないからである。このことは、触覚の訓練なり教育によって、触覚にすばらしい力を発揮させる余地のあることを示している。

このことから、ルソーは、子供の暗やみ遊びなどの実例をあげ、詳細に述べている。つまり、ルソーは、子供に暗やみの中で遊戯や活動などをさせることによって、やみに慣れさせ、いろいろな事柄を学ばせ、触覚の発達をはかろうとしている。そして、暗やみの中で行なうことの理由は、明るいとくろでは、どんなに注意を払っても、視覚に助けられるか、気をそらされ

正確に目測する事実をあげ、視覚の訓練なり教育によって、大小遠近などの関係をより正確に決定できるようにすると述べている。そこで、ルソーは、視覚の訓練なり教育に当たって、視覚を触覚に従属させ、視覚の性急さを触覚の鈍重であるが確実な歩みによって抑制することが必要であると述べ、さらに、物の形状や距離を忠実に伝えるように視覚をならすには、それ以前に、視覚を触覚と比較することじつくり長い時間をかけておかねばならないと述べている。

こうして、ルソーの視覚教育は、物の大小、広狭、遠近などの目測から始まって、高さ、長さ、深さ、距離などの目測へ、さらに物の形態の観察や描写へ、さらにまた、目と手を使って図形を描き、それらを組み合わせ、互いに重ね合わせ、それらの関係を調べる初等幾何学へと展開されていくのである。

目測についての機会は、子供の生活の中にくらでもありとルソーは述べている。たとえば、あそこにずいぶん高い桜の木がある。桜んぼをとるにはどうすればよいか。納屋にあるはし子で間に合うだろうか。ずいぶん幅の広い小川がある。どうしたら渡れるだろう。中庭にある板で両岸に届くだろうか、というようなことである。このような子供の日常生活に起ることを十分に生かし、教育の機会にしようというのである。そして、目測の誤差を子供が自分で修正できるようにさせることである。

それには、人の歩幅、両腕を広げた長さ、人の身長などの自然の尺度を使用させればよいとルソーは述べている。

物体の大小、遠近、形態などを正確に観察し、物体そのものをよく知るには、写生が有効であるとルソーはいっている。その上、子供というものは、偉大な模倣家であり、あらゆるものを描こうとするから、写生は一層効果的である。ただし、写生は技術の修得それ自体が目的ではなく、目を正確にし、手を柔軟にし、感覚の明敏と身体のよい習慣をつちかうものとして、ルソーは取り上げている。それゆえ、模写させたり、既製の絵を手にして絵を描かせたりしないで、自然を唯一の教師とし、実物を唯一の写本としなければならぬ。すなわち、子供に本来ありのままの実体を見させるようにするのであって、それを描いた紙などを見させるのではない。家を見て家を描き、木を見て木を描き、人間を見て人間を描くようにさせるのである。それは物体とその外観を正しく観察するようにさせ、誤ったありきたりの模写を真の写生であるように思わせなためである。このような図画教育によって、より正確な目とより正確な手とがつかわれるのである。

ここにおいて、ルソーは、私たちが常に考えていなければならないことがあるといっている。それは、子供のするすべてのことは遊びにすぎない、いや、遊びでなければならぬという

こと、それは自然が子供たちに述べるいろいろな運動が容易で、しかも自発的なものであり、自分の遊びを一層楽しいものにするためにいろいろ変化をつける技術であるべきで、いささかも強制などでそれを仕事にかえてしまうようなことがあつてはならないということである。

聴覚教育 ルソーによれば、聴覚は、空気の振動を感受する感覚である。そこで、耳を敏感に働かせ、耳に伝わる感覚によつて、それをひき起こす物体が、大きいか小さいか、遠いところにあるか近いところにあるか、その振動が激しいか弱いかを判断できるようにする聴覚の訓練なり教育が重要となつてくるのである。

そのために、野原や谷間で耳を地面につけると、立つたままでも聞くよりも遙かに遠い所から人の声や馬の足音が聞こえるというような経験（聴覚だけによる経験）とか、稲妻が光つてから雷鳴が聞えるまでに経過する時間の開きで、どのくらい離れたところから雷が起つてくるのか判断できるというような経験（聴覚と視覚との併用、つまり聴覚と他の感覚との併用による経験）をできるだけ子供に経験させることが大切であるとルソーは述べている。次いで、ルソーは、人間には三種類の音声があるということから、音声表現についての教育、すなわち、言語や音楽の教育にまで言及している。

味覚教育 ルソーによれば、味覚は、ものの味を感じ知る舌

の感覚であり、人類に対する一種の自己保存の手段ともいうべきものである。自分に適した食物を選ぶために、経験によつてそのものの知識を得、選び方を学ぶまで待たなければならぬとしたら、私たちは、とつくに、飢えて死んでしまつていないさもなくば毒にあたつて死んでしまつていよう。ところが天の摂理は、感覺的存在の快樂を、その自己保存の手段としてくれており、私たちの舌に快味を与えることによつて私たちの胃に適したものを教えてくれるのである。それゆえ、自然状態において、人間が一番うまいと思つた食物が一番健康にいいものであつたことは疑う余地がないとルソーはいうのである。ルソーによれば、最も自然な味覚は、最も単純な味覚である。自然な味覚は単純であるから、普遍性をもつ（どこにでも通用する）と共に、最も変わりやすい。これらのことは、人間の最初の食糧である母乳が、最も単純な味覚であるということからも明らかであろう。

単純な味覚は変わりやすいがゆえに、私たちは自然の状態から遠ざかれば遠ざかるほど、ますます自然の味覚を失つていくことになる。あるいはむしろ、習慣が第二の自然性となり、私たちはこの第二の自然性をすっかり第一の自然性と置きかえてしまうので、私たちの誰一人としてもはや第一の自然性を知ら

ないようになっていける人間ではない。

ルソーは、どこへ行くにもフランスの料理人を連れて行かなければ、他国で飢え死にするような人間に子供をしてはならないというのである。そのために、子供にできる限り自然の味覚を保存させるべきだと力説している。つまり、味覚は、単純であればあるほど、どこにでも通用するからである。そこで、子供の食物はごく普通の単純なもの、果物、野菜などの植物性食物やパンと水といったものにし、舌には淡白な味だけになれさせ、そして、好ききらいを生じさせないようにすることである。したがって、子供の味覚は洗練すべきものではなく、むしろ自然のままにしておくことが望ましいのである。

このようにして、ルソーの味覚教育は、子供本来の味覚を不自然にかえないで、自然の示す道に沿って行なうという配慮さえすれば、あとは子供の好きなように、食べさせ、駆けまわらせ、遊ばせてやればよいというのである。さらにいえば、ルソーは自然食推進運動の先駆者でもあったのである。

嗅覚教育 ルソーによれば、嗅覚の味覚に対する関係は、視覚の触覚に対する関係と同じである。嗅覚は味覚に先立って、

さまざまな物質が味覚にどんなふうを感じるかを予告するものである。そして、前もって受ける印象に応じて、これは求め、あれは避ける、というようにさせるのである。

さらに、嗅覚は想像力の感覚である。たとえば、化粧室の甘美な香りや愛人の胸にさしている花のにおいときめきを覚えるといったことなのである。このように、嗅覚は、感情生活と密接に結びついた想像力の感覚である。それゆえ、嗅覚は、想像力も情緒もほとんど発達していない幼児期には強く働かないといえる。このことは、子供の嗅覚が大人の嗅覚より鈍感であるということではない。時には大人の嗅覚より鋭敏なこともあるであろう。しかし、子供は嗅覚に他のどんな観念も結びつけないので、それにとまなう喜びや苦しみの感情に容易に動かされないということである。

想像力も情緒もほとんど発達していない幼児期には、嗅覚の教育をとりたててやる必要はない。ただ、嗅覚と味覚との自然な関係をありのままに学ばせればよい。たとえば、菓のりがきを快い香料でつつみかくすようなことをして、この自然な関係を変化させ、子供をだまそうとしたりしないことである。このようなことをすれば、甘美な香りも子供にとっていやなおいすぎなくなってしまうとルソーはいうのである。

以上より、幼児期の子供は、まだ文字の書物を読むことがで

きないけれども、自由で自発的な遊びや身体活動の中で、手・目・耳・舌・鼻などの五感を働かせることによって、自然の書物を読むことができるのである。子供の全生活活動を通して、子供は自然の中にある法則性を感性的かつ認識的に身につけていくのである。こうして、ルソーの感覚教育は、子供の全生活を豊かにし、将来の高次な認識発達への基礎形成を保障するものとなるのである。

むしろ

これまで、ルソーの幼児教育思想を(上)(下)の二回にわたって、根本思想、教育の基本原理、幼児観、家庭教育、身体教育、感覚教育に焦点をあわせて考察してきた。これらを通じて、ルソーの幼児教育思想の三大特色を示すと次の通りである。

ルソーの教育思想はもとより、幼児教育思想においても、まずあげなければならない特色は、「合自然の原理」である。ルソーにとっては、自然は教育の目的原理であると同時に、教育の方法原理でもある。自然の示す法則に従い、子供の自然な心身の発達に合わせて教育を行なわなければならないのである。

ルソーの幼児教育思想の第二の特色は、ルソー自身述べているように、幼児期においては特に重要であるという「消極教育」である。消極教育は、外から子供に強制する注入主義的な教育

ではなく、よい環境を整えるなどの教育的配慮をし、子供の心身の発達を保護した上で、子供を自由にのびのびと自発的に活動させる教育である。これはまた、子供自身の力で真理を知る能力を身につけさせることを旨とする教育でもある。

ルソーの幼児教育思想の第三の特色は、幼児期にもその時期固有の完成と成熟があるという「幼児観」である。このルソーの幼児観が、近代的幼児観確立への礎石となるのである。

このようなルソーの幼児教育思想の特色は、ルソーの生きた時代が当面していた諸問題を解決するために、ルソーが現実批判を通じて、幼児教育のあるべき真の姿を探究するその努力の過程から生まれた理念や原理としての成果である。しかしながら、このことは、ルソーの幼児教育思想そのものが限界をもっていないということではない。ルソーの作品や思想に接するものは、彼の生きた当時の科学の未発達や時代の主要関心の差異による限界や誤りを少からず見出すであらう。

ルソーの思想そのものの中に限界をもっているとはいえず、人間が自由で平等で幸福であるためにはどうすればよいかということ、社会創造と人間創造との両側面から追求し、民主主義社会創造のための基本原理と新しい人間像を彫りにした点、教育の対象である子供をよく観察し、よく研究することが、教育の基本的研究課題であることを力説し、旧来の封建的・伝統的

幼児観に対して、子供の心身の発達段階に相応した教育を行なうべきことを唱道し、学習の主体として子供をとらえ、子供の権利や世代の権利を確認することによって新しい幼児観を提示した点、また、当時の非教育的な風習に挑戦して、家庭教育における両親の役割の重大さを主張した点、さらに、子供の自由で自発的な身体活動による新知育論を展開した点、さらにまた、子供の自由な自己活動を通じて、主体的な人間を形成する上での基本的なものを感性的かつ認識的に身につけさせることによって子供の生活を豊かにし、将来の高次な認識発達への基礎形成を保障するというきわめてユニークな感覚教育論を展開した点、これらの諸点によって、ルソーは幼児教育思想の流れの中に一大転換をもたらしたばかりでなく、ルソー以後の教育思想家たちに好むと好まざるとにかかわらず、大きな影響を及ぼして行くのである。まさにルソーの幼児教育思想は、近代の幼児教育の基礎づくりにふさわしい画期的なものであったといえる。最後に、「子供に最初の一言をいう前に、子供を十分に観察しなさい」というルソーの言葉を明示して、結びとしたい。

(広島大学)

参考文献

- ① Oeuvres complètes de J. J. Rousseau par P. R. Anguis.
Tome III. 1824.
- ② 永杉喜輔・宮本文好・押村襄訳、『エミール』、玉川大学出版部、一九七一年版。
- ③ 桑原武夫編、『ルソー研究』、岩波書店、一九六八年版。
- ④ 稲富栄次郎著、『ルソオの教育思想』、福村出版、一九七〇年版。
- ⑤ 梅根悟著、『ルソー「エミール」入門』、明治図書、一九七一年版。
- ⑥ 川口勇編著、『就学前教育』、第一法規、一九六八年版。
- ⑦ 荘司雅子著、『改訂幼児教育学』、柳原書店、一九六四年版。

(付記) 原典は、考察しようとする視点から言葉の概念を明確にするために使用した。他は訳本によっている。

私の保育

—— たりない!! 何度かぞえても一人たりない! 帰るし
たくをする前には全員いたはずなのに。——名前を調べてみる
とSちゃんがいません。「Sちゃんは?」と子どもたちに聞くと、「知らない」と答えました。

さつきまで確かにいたはずなのに、どこへ行ったのかしらと思つて、ゆうぎ室、校庭、お手洗い……と探してみましたが、どこにも見えません。次第に不安になってきて、あつちのへや、こつちのへやと走りまわったのですが、やっぱりいません。

まっさおになって主任の先生のところにかけてこんで「Sちゃん、いないんです!」と話すと、「もしかして、家へ帰つたのかも知れないから、すぐに電話してごらんさい」と言われて職員室へ走って行きました。ダイヤルが回るのもどかくしく思いつながら電話をかけると、「S子はまだ帰っていませんけど……」との返事。一瞬、交通事故などよくない事が頭に浮かんできま

したが、どうすることもできず、へやにもどつて他の子どもたちに「帰るのはね、先生にさようならをしてからのよ……」と話しました。すると、どこからかS子がトコトコへやに入つて来ました。

島田 ななみ



「あら!! Sちゃん!」
私はかけ寄つて、「Sちゃんが急にいなくなつちやっただんで、先生心配してたのよ」「Sちゃんどうしたの?」と思わず聞きました。

「あたしね、おうちかえつたの。そうしたらママがね、ようちえんまでつれてきてくれたの」と本人はケロツとしています。入園して間もない四歳児には、黙つて帰る事がそれほどたいへんな事とはわかっていないと知りながらも、一人で帰つては危ないこと、帰るときは先生にさようならをしてから、お母さんと一緒に帰ることなどを、夢中で話したのですが、Sちゃん

は、ウンウンとうなずきながら、隣の子どもに話しかけたりしているのです。

一度に、安心感と自分の至らなさに対するもどかしさがまぎり合って、全身の力が抜けて行くように思われました。

ほんとうに子どもたちの動きがはやく、それは想像以上のものでした。

今、ここにいるからといって安心してはいられません。次の瞬間にはへやに行つて、やつとの手で手に入れたカタツムリを、ジャブジャブせつけんをつけて洗濯してしまつたり——。ここと思えばまたあちら……。子リスのように動きまわる四歳児が四十人もいるのですから……。新米とはいえ、親リスもそれにつれてとびはね、走りまわり、ときにはつまずいてころんでしまつたり、失敗につぐ失敗で、先生は大いそがしです。

☆ 「ぼくのめぐみまだ？」

私の園では、新入園児を、先生と五歳児が同じ立場に立って迎えようと、三年前からたてわり保育、というのをしています。

たてわり保育では、四歳児が入園する以前に、五歳児との組み合せを決めておき、一年間、運動会、遠足など活動に応じてたてわりの組合せで行なうようになっていきます。

年長組は、四歳児が入園する前から「幼稚園に来たらままご

としようね」「ブランコしようね」などと書いた手紙を四歳児に渡し、新学期が始まると、年長児だけ八時十五分に登園して自分たちの活動をします。一時間遅く年少児が登園してきた時に、五歳児は迎えに行き、靴、帽子、かばんの置き場所を教えあげたり、服のボタンはめを手伝つたりして一緒に遊ぶのです。

私の園には主任を含めて教師が三人いるので、この四歳児と五歳児の組合せを十三組くらいずつ三グループに分け、四月初めの時期には、一グループずつ担当するようになっていきます。

四月では、五歳といつてもまだ四歳のからをつけているようなところもあるので、そうした子どもたちがどのくらい四歳児の面倒をみられるのか、教師としては、どの程度五歳児に面倒みるように促すのか、途中でいやになって放り出してしまうのではないか…… などと心配していたのですが、いざ始まってみると、五歳児の方には、自分たちが以前にやつてもらつたように年少児の世話をしようとする姿勢がみられ、「ぼくのめぐみ(年少組) いないよ」「あたしのめぐみまだ来ない」と毎日年少児を迎えるのを楽しみにしているようでした。ところが、あまり一生懸命に世話をしすぎて、年少児がかこうとしていた絵まで年長児が代つてかいてあげたりして、私たちをびっくりさせることもありましたが、教師の話をきいて「Aちゃん、わ

「あった？」と隣にすわっている年少児に尋ねている姿をみると、何かあたたかいものが感じられました。

四歳児の方は、五歳児に教えてもらったとおりにうしろからくっついて行く子もいれば、おもちゃのとりっこなど年長児と対等にやり合い、いつも年長児に「はな組(年長組)にいばる気か？」といわれるのでそれを逆手にとって「はな組なのにめぐみにいばる気か？」と年少とはいえ、負けず劣らず言い合う子どももいます。

こうしたかかわり合いの中で、二人の関係がうまく進んでいく場合もありますが、年少児が年長児をこわがり、みんなと一緒に遊ぶのを食べようとすると「○○ちゃんと一緒にいやだ」といって泣き出したり、年長児のやっている電車ごっこに入ってもらおうとすると、「ぼく、いやだなあー」「どうして?」「だってー○○ちゃんこわいんだもん」などと言い出す子どももいます。

そうした一つ一つの場面で、私は一体何といっておいたらよいのか迷ってしまいます。

☆ 「ぼくにつかまっついいよ」

一カ月くらいたって子どもたちも先生もやっと慣れ、四歳児も朝幼稚園に来て、少しずつ自分から遊びだせるようになって

てきました。

そんなある日、毎日喜んで登園していたK子が、朝、靴箱のところで母親にしがみついて泣いていました。「今日はなんだか朝からぐずって、幼稚園に行きたくないって言うんです」とお母さん。「Kちゃん、先生と一緒にいこう」と誘ってみても、体をよじらせて大声をあげて泣いています。お母さんがKちゃんの手をふり払うように「よろしくお願ひします」と言って帰っていったあと、私はKちゃんのをばにすわって、

「どうして幼稚園来たくないの?」と聞くと「だってつまんないんだもん」とポツリと一言返ってきました。そのとたん、毎日K子が一人で遊んでいることが多く、フツとつまんなような表情で友だちを見ていたりすることを思い出しました。先生は何でも言えるK子ですが、友だちの中では充分に自分を出しきれず、時々自分のからの中に閉じこもってしまうようなところが、そうした発散しきれない部分が積み重なって、K子に「幼稚園つまらない」と言わせてしまったのだと思われました。

こうしたK子のように気付いていながら、何もせずにいた自分がとても後悔され、この場合のように、子どもの中からはつきり表われる場合だけでなく、見えない部分でこれと同じことをしているのではないかと心配になったりします。

また、生活に慣れてくるに従って、少しずつ子どもたちも本領を発揮してくるのですが、それに伴って「Bちゃんノ、そんな高いところあぶないわよ」……「先生がいないとき、鉄棒やらないお約束でしょう」……「うんていは、はな組になってからやるのよ」 「ほら、そんなにお水をたくさん出したらあふれちゃうでしょ」…… など、一日中小言をいい歩いてしまい、保育の終わったあと、「今日は一日何をしていたのかしら」とひどく後味の悪い思いをすることも多くなりました。

そして、そういう時に注意される子どもはいつも決まっています。

Yちゃんもその一人。わけもないのに突然近くにいる子どもをぶって泣かしたり、水をひっかけたり……「いけない」と言われるとますますやったり……。いろいろな言い方で話して聞かせても、その時は「わかった」というのですが、すぐに同じことをやるので、子ども同志の中でも「Yちゃんはこわい」と思っている子もいて、私もどのようにしたらよいのか困ってしまいました。

ちょうどそのころ、歩いて三十分ぐらいのところにある有栖川公園に遠足に行きました。公園には、幼稚園にはみられないたくさんのお土と、こんもり茂った木々があります。子どもたちは公園につくと、勢いづいたように元気な足どりになり、小川

のそばにある小さな赤土のかげのところに来ると、みんな上へかけのぼっては、おしりをつけてすべり下りて来ます。どの子も「どろのおすべりだ!!」と、手も足もどろだらけになって歓声をあげていました。

Yちゃんも必死になって何度も登ったりおりたりしていましたが、そのうち、登っている途中ですべり落ちそうになっている子どもに「Aちゃんノぼくの手につかまっていいよ」「よしよ、よいしょ」と上まで引っぱり上げています。

Yちゃんに、こんなやさしいところがあったのだなあと感心していると、すべり降りて来たYちゃんが、「せんせい、ぼくが上までつれてあげようよ。手につかまるんだよ」といって私も引き上げてくれました。「わあノYちゃんのおかげで一回もすべり落ちないのぼれちゃったわ。Yちゃん登るのじょうずね」というと、ちょっとうれきそうな顔をしてにっこり笑い、またすべりおりて行ってしまいました。

私は思いがけないところでYちゃんを再発見できてとてもうれしくなったと同時に、その子どもの持つすばらしい力が発揮できるような活動を私が考えてあげなくては、「ダメ、ダメ」と注意ばかりしている先生からは抜け出られないように思われました。

☆ 「むりにやったら泣いちゃうよ」

五月になってから、突然声が出なくなりました。毎日、子どもに負けじと大声を出しているのですから無理ありません。

「Aちゃん、静かにしないとみんながお話きこえなくなるわよ」と言いながら、気がついてみたら、自分が一番大声を出していることもしばしばあります。なにしろ私のクラスの子どもたちは「もう片づけましょう」と言う、「いやだよ」とどこかへ走って行ってしまおうし、帰るときぐらい落ちついて絵本でも読もうと行ってしまおうし、帰るときぐらい落ちついて絵本でも読もうと思うと、あちこちで騒ぎ出し、一人静かにしたと思うとまた別の子がとび上がった……まるでたくさんのすいかを水の中に沈めるようなもので、一つ沈めても他のすいかポカポカ浮き上がってくるような感じです。

そこへいくと、子ども同志というのは不思議な力を持っているようです。

M子ちゃんは、四月からなかなかクラスの中に入らず、毎日靴箱のところ、メソメソ泣いていました。一度男の子にぶたれてからは特にひどく「Mちゃんいや、おとこの子こわい」と言うので「もうぶつたりしないからだいじょうぶよ」といくら話しても入って来ません。こちら、少しかまわずにしておい

たり、指人形を使って話しかけたり、みんながかいた絵をその子のいる所にまで持って行って「これTちゃんがかいたの。すいかなんですって。Mちゃんすいか好き？」などとあの手この手で話しかけてみるのですが、なかなか反応はかえって来ません。

お弁当になってもへやに入ってこない時には多少強引にでもへやに連れて来るのですが、それをみていた子どもが、

「むりにやってもだめだよ。その子泣いちゃうよ」と言うのです。M子がなかなかへやに来ない時、「誰かMちゃんつれて来て」と頼むと「ぼく行って来てあげる」といって走り出たN夫は、どのように言ったのか、間もなくM子をつれて「ぼくつれて来たよ」と言ってやってきました。

私が何と声をかけてもビクともしなかったM子がどうして素直について来たのか、N夫がどんなふうに行ったのか、こっそりその秘法を教わりたいような気がしました。

こうして、何かをさせようやっつきになればなるほど、子どもの中に強い反発力がふくれ上がるのを見て、自分がいかに子どもをことばだけで動かそうとしているかが痛感されました。

毎日たくさんの事を子どもたちに教えてもらいながら、二学期こそ、もっともつと子どもと一緒に遊んで、子どもを見つめて行きたいと思っています。

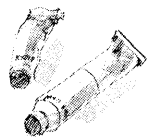
(港区立東町幼稚園)

土をこねる

現代の科学的な物の見方では、目に見えて、耳に聞こえることが重視される。視覚と聴覚にふれないものは、存在すらも疑われる。樹木も、山も、空も、月も、神秘さや、不思議さを失い、見えた限りの物質のかたまりになってしまった。深く探究する科学者は、このような表層的な見方をしないであろう。科学の時代に住む一般人の周囲の物の見方が、外面的になつてしまつたのである。

現代人が子どもを見る見方も、その例外ではない。子どもの外側の、目に見える部分だけしか見ない傾向はますます強くなりつつある。子どものすることは、おとなよりも力が弱く、小さなことしかできないこと。こういう能力の多少を見ることは容易である。しかし、子ども自身の内部の世界があることに気がつかない。たとえ、小さな赤ん坊でも、気持ちが悪かったり、不快だったりする感じ方があることに気がつかない。だから、赤ん坊が泣くとき、母親は、どうして泣くのだろうと原因を詮索する。けれども、悲しいのでしよう、いやなのでしようと、

津 守 真



赤ん坊を慰める母親は少ない。母親が赤ん坊を自動車の中に閉じこめて遊びにいつてしまうような新聞記事を多く見るとき心が痛むが、その底には、現代流の外面的な物の見方が大きくはたらいっているのだと思う。

幼児は、外面的な見方をしない。風に木の葉が揺れる音をきくと、何かが運ばれてくるように感じ、お化けがくるのかとこわがる。閉じた箱の中は、幼児にとっては常に魅力であり、不思議さにみちている。内部をもつたものは、子どもには生きたものである。子どもの世界は、生きて動いており、それ自身、不思議さをもつた内部である。子ども同志は、互いに相手のことを、外側の行動からだけ判断することをしない。そばで見ているおとなにはわからないことを、ちゃんとかみとっている。おとなのように合理的なけんかの仲裁をしない。けれども、相手の微妙な心持ちを感じたり、いつの間にか直りして、遊びつつける。おとなの仲裁は、一面だけをぬき出して善悪を問うことが多く、子どもは自分と相手の生きた内面の全体にふれ

ている。

一体、いつ、どのようにして、おとなの外面的で、一面的な見方がつくられていくのであろうか。

子どもが土いじりを始める。水と一しよにこねて、手もひじも、泥だらけにして遊ぶ。うれしそうで、その動きは生きていく。おとなが来て、泥はやめなさいと叱る。叱る時おとなは、子どもの動きをよく見て叱るのではない。子ども自身の外被、洋服がよごれること、その手で壁や家具をさわるとよごれることに、おとな自身ががまんがならないのである。外側をきれいにしておきたい気持ちほだれにでもある。現代は外面を重んずる時代であるから、その面だけが強調されやすい。しかし、外面、だれにでも、きれいに整頓しきれない混沌とした内面がある。何が生まれ出るかわからない、さまざまものがいくつにている混沌は、内面を代表するものともいえる。それはすぐには分類整理することはできないが、時間をかけている間に思いがけないものが生まれ出る母胎である。何が出てくるかわからないものを、時間をかけて待つということ、現代人にはがまんができない。早く、いつでも即座に、美しい結果を見なければ気がすまない。現代というきびしい時代に住む者であるから、それを責めることはできない。しかし、それだけでは、教育と

いう仕事はできないということはいわねばならない。教育は、美しい外側ができる以前の混沌とした内面にこそかかわるものだからである。

土をこねるといことは、教育を象徴するものといえる。土をこねるのは、部分品を組み立てる作業とは異なる。混沌としたものに、自分の手で動きをつくり、生命を与えていく仕事である。それは形式にはめる作業ではなく、こねている間に、思いがけない形を生み出す作業である。あらかじめ定められた形を組み合わせて作る意図的な作業ではなく、つくる者の想像力や直観に導びかれてなされる作業である、子どもが土をこねる作業も、おとながなす教育という仕事も、この点で大へんよく似ている。

土という自然の恵みにふれて、子どもは自己の内面を形作ってゆく。土にふれるときの子どもは真剣であり、長い時間、そこに打ちこんで遊ぶ。そこで子どもは混沌から何ものかを生み出す体験をしている。だが、それも外面的にみれば、泥水をはねかえし、洋服をよごす、際限のない子どものいたずらである。よごすのは外側だけである。洗えばまたきれいになる。それを叱ってやめさせる時に、傷を与えているのは、子どもの内面にある。その内面は、現代人には見えにくいのである。

土をこねるといことは、子どもの発達の栄養源である。そ

れにもかかわらず、現代の都市生活は、子どもからその栄養素をなくしつつある。高層建築のマンションに住む子どもたちは、親がよほど気をつけなければ、自然物にふれることができない。これは、現代の親にとっても、重大な課題である。同時に、これは、幼稚園のとりくむべき課題でもある。こぎれいなことを好む子どもでも、子どもは原始的な遊びを喜ぶ。その喜び方は、小さいときから自然物にふれ親しんできた子どもたちよりも、一層、はめをはずし、乱雑である。その時期をどのようにしてのりきるかということは、容易なことではない。担任の先生と主任、園長の理解と忍耐を要する。

子どもの行動を、外側から客観的に見ることが科学的であるという考え方が、この二十年ほど、強く支配してきた。私もまた、そのような考え方からなかなか抜け出すことができなかった。しかし、人間のことを考えるのに、客観性ということは第一要件ではない。人間のこぎた内面にいかにしてふれることができ、内なるものがいかにして育てられるかということが重要である。それは、個人の内面というだけでなく、人間の本性にふれることである。まして幼児教育というときに、それは、外的な要素を組み合わせてできることではない。そういう考え方は根本的に間違っている。教育は、内外両面を備えた人間そのものに、じかにぶつかって、そこから生み出していくものでなければならぬ。それは人間同志の落着いた営みであるはずである。

内面から見る見方ができるように、子どももおとなも、混沌の中からつくり出す喜びをもてるように、一九七三年の宿題は大きい。

幼児の教育 第七十二巻 第一号

一月号 定価一〇〇円

昭和四十七年十二月二十五日印刷
昭和四十八年一月一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一

印刷所 凸版印刷株式会社

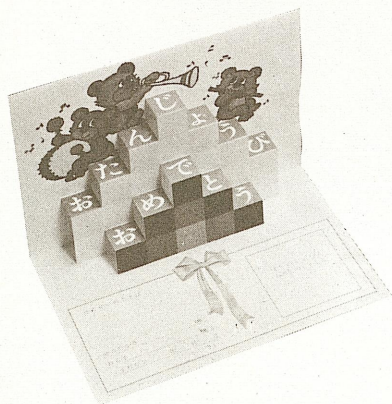
111 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所フレイベル館にお願いいたします

今年もすてきな
お誕生カードが
できました



お誕生カード(A)……………60円

毎月、その月に誕生した子どもに贈る美しいカードです。開くと楽しい絵と「おたんじょうびおめでとう」の文字が飛び出します。

お誕生カード(B)……………70円

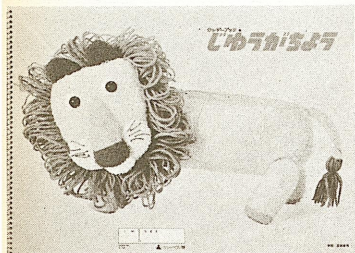
ひとつの絵が三場面にかわる楽しさと夢のあるお誕生カードです。写真やいろいろな記録の他、手形も押せます。



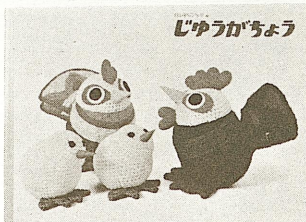
じゅうがちょう(A1)……100円



じゅうがちょう(特1)……120円



じゅうがちょう(特A)……150円



じゅうがちょう(特2)……120円

この他

じゅうがちょう(A2)……100円

じゅうがちょう(A3)……100円

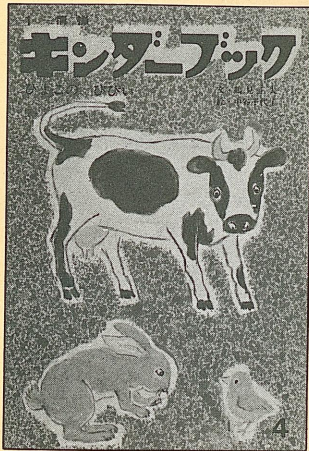
じゅうがちょう(F)……160円

があります。

お子さまの成長にあわせてお選びください

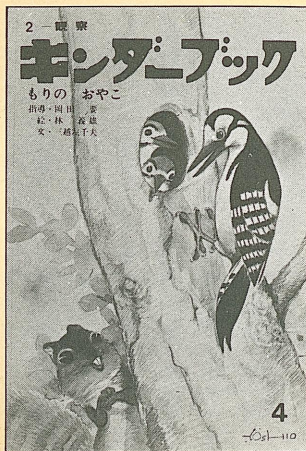
4月号・フレーベル館の5大月刊保育誌

情操をゆたかにし、創造力をのばす



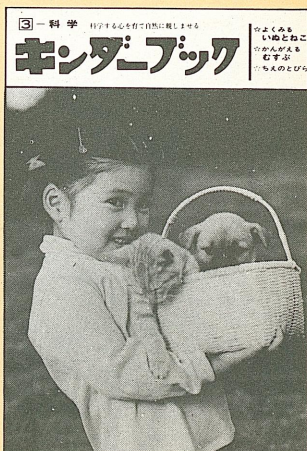
キンダーブック ①-情操
A4判・20頁・多色刷 つばめのおうち こいのぼり 特別付録
団体購読価 100円

観察の眼をそだて、心情をゆたかにする



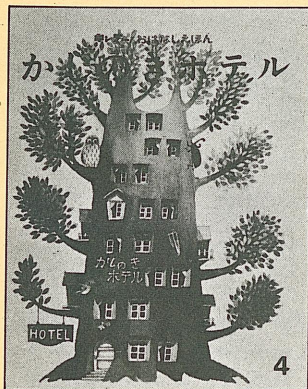
キンダーブック ②-観察
A4判・36頁・多色刷 つばめのおうち こいのぼり 特別付録
団体購読価 130円

科学する心をそだて、自然に親しませる

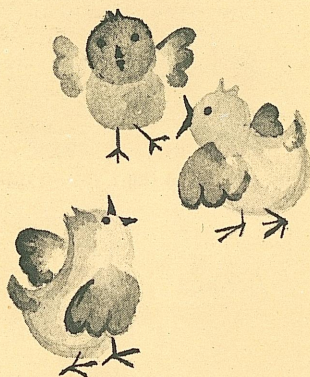


キンダーブック ③-科学
A4判・36頁・多色刷 つばめのおうち こいのぼり 特別付録
団体購読価 130円

幼児の心を育てる



キンダーおはなしえほん
L判・36頁・多色刷 こいのぼり 特別付録
団体購読価 130円



園児をもつ母親の専門誌



ホームキンダー
L判・100頁・多色刷 特別付録
団体購読価 100円